

「だからこそ」の経験－東京分室と共同研究－	1
2024(令和6)年度「指定研究」等研究成果報告	2
2024(令和6)年度「一般研究」(予備研究)研究成果報告	12
2024(令和6)年度東京分室PD研究員個人研究成果報告	15
公開シンポジウム報告	19
公開研究会・講演会報告	22
国内研究調査報告	29
海外研究調査報告	32
獣異抄ワークショップ開催・参加報告	34
衆報	36

研究所報

「だからこそ」の経験 – 東京分室と共同研究 –

真宗総合研究所東京分室長 後藤 晴子

大谷大学真宗総合研究所東京分室が、2016年度に若手研究員の研鑽の場として東京・湯島の親鸞仏教センター内の4階に開設されて2025年度で10年目を迎える。東京分室のひとつの大きな特徴として、若手研究員の研鑽の場が、本学(京都)から遠く離れた東京に開設されていることがあるだろう。これは初代学長・清沢満之が大谷大学の前身たる真宗大学を東京巢鴨の地に創立したことにも由来しているが、文系の研究員のみで構成されている少人数の部門が本学を遠く離れた地に開設されていることは全国的にみても比較的珍しいのではないだろうか。もちろん地域研究など調査地の近くにいわばその窓口として研究所を持つことは文理を問わずあるだろうが、東京分室のPD研究員は人文系、社会科学系の研究員が所属しており、必ずしもフィールド系の学問を専門としているわけではない(たとえば2025年度は、真宗学、宗教学、教育学、仏教学の研究員が所属している)。もちろん本学と離れていることで、事務方の細やかなサポートをもってしても、図書館利用などで不便なこともないわけではない。しかしそれでも東京という進取の気風に満ちた学問の中心地で活動できるという利点は、学位を取ったばかりの若手研究員たちにとってとても大きい。気軽に毎週末ごとに様々な大学で開かれる研究会や学会に参加したり、資料調査に国会図書館に赴いたり、関東圏の研究者と交流することができる。

またもうひとつの東京分室の大きな特徴として、専門の異なる研究員たちが個人で進める個人研究とは別に、室長と共に「宗教と社会」にまつわる共同研究を実施することがあげられよう。「研究員」制度は、その母体(大学や研究所)によって異なるが、共同研究は専任教員の主催するプロジェクトに参加するといったスタイルが比較的オーソドックスであろう。それに対し、東京分室の共同研究は「宗教と社会研究」という大きな枠組みはあっても、その時々分室長とメンバーで何ができるかを考え、立案し、準備し、実施するものである。そのため共同研究を同じメンバーで長

期的な展望を持って、展開することは難しい。研究員にも分室長にも数年の任期がある。しかしながら、(いま・ここ)のメンバーだからこそ、生み出せるものや受け取ることができることもあると考える。

先に記したとおり研究員たちの学術的背景は異なるが、歴代の分室長も同じく専門分野は様々だ。そのため共同研究での協働は、研究員たちにとって(もちろん分室長にとっても)そのまま学際的な研究への実践にもつながる。卑近な例で恐縮だが、自らを振り返っても若い時分にはいわゆる「専門馬鹿」になりがちである(またそれも研究者としては必要なことでもあろう)。だが、分室で共同研究を実施する場合には、そうではられない。共同研究では、必ず自身の専門を基盤に「宗教と社会」という切り口から展開する必要がある。公開シンポジウムや公開研究会はひとりの研究員が中心となることが多いが、全員がそこに参与する。よって常に分野の異なる他の研究員に企画の趣旨や意図を「わかりやすく」説明する必要に迫られる。また一般の参加者に向けて専門用語に拘泥しているようでは、趣旨は伝わらない。よりわかりやすい言葉で説明する必要がある。また共同調査では、社会学などフィールド学系の研究員たちが主導的に調査を立案するが、フィールドワークとは縁のない領域の研究員たちも一緒になって実施する。こうした経験は、東京分室の共同研究「だからこそ」の経験であるに違いない。

私自身も関東圏ではなく、また本学と研究員制度は全く異なるが、他大学の研究所で3年間研究員として、その研究所「だからこそ」の経験をたくさんさせて頂いた。3年という時間は、決して長くはない。着任してしまえばあっという間に時間が過ぎる。わずかな時間ではあるが、東京分室のPD研究員にはこれまでの研究員がそうであったように、これからは「だからこそ」の経験を積み重ね、新天地へとさらに飛躍する道筋を見つけていただければ幸いである。

2024 (令和 6) 年度「指定研究」等研究成果報告

特定研究「大谷大学樹立の精神」100年

佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」に込めた願いとその背景を尋ねる

研究代表者・教授 一楽 真
(真宗学)

大正時代、1918 (大正 7) 年に「大学令」が出され、帝国大学以外の公立・私立の大学が認められることとなり、大谷大学は 1922 (大正 11) 年に大学令による大学として認可されているから、いち早く認可を受けた大学の一つである。そして、校名も「真宗大谷大学」から「大谷大学」へと改めた。その大谷大学が誕生した 2 年後の 1924 年に第 3 代学長に就任した佐々木月樵は、翌 1925 (大正 14) 年 5 月 1 日の入学宣誓式において、「大谷大学樹立の精神」という講演を行い、大学令に基づく大谷大学としての使命を述べる。この佐々木のことばは、初代学長清沢満之の「真宗大学開校の辞」と併せて、本学の建学の精神として位置づけられている。

2025 年はまさに「大谷大学樹立の精神」が発表されてから 100 年という節目であり、「大谷大学樹立の精神」に込められた佐々木月樵の願いをあらためて確かめていくことが本研究班の目的である。

この目的を達成するためには、まず佐々木の生涯や著述活動の全体像を把握することが必須となる。佐々木月樵の著作に関しては、すでに『佐々木月樵全集』(全 6 巻)にまとめられているが、そこに収載されているものは著作などのごく一部であり、論文やエッセイ等の収載されていないものが多く残されている。

本研究班では、『佐々木月樵全集』に収められていない著作について、それらを収集してデータ化し、その一つひとつについて校正・読解・検討する作業から始める。幸いなことには、すでに 2006 年度「大学史研究班」によって佐々木に関する文献はかなり収集されており、そのリストも残されている (そのリストによれば、592 点の論文・エッセイなどが確認できる)。本研究班においては、まず「大学史研究班」によって作成されたリストをあらためて精査・整理し、収集されていない文献についてはそれらを収集し、すでに収集されている文献については文字起こし・データ化して校正していく作業をおこなっている。

現時点では、文字起こし・データ化についてはほぼ終えている。また、定期的に行っている研究会において、各論文・エッセイに関する校正と読解をおこな

っているが、現時点でその中の約 40 点ほどの文献に校正が及んでいる状況である。

また当初より課題でもあったが、特に 2024 年度あたりから、佐々木の文章の初出雑誌と、それらのいくつかが集成されて一冊の著作として刊行され、さらに佐々木没後に全集になっていくという過程について、その変遷過程の調査にも着手している。たとえば、初出原稿と、著書の間に、佐々木の手が加わっているのかどうか、どの程度加わっているのかということなど、特に RA を中心に前後の関係を調べている。但しこの調査は、部分的に訂正や加筆が加わっているものであれば、その関係を見出すことは比較的容易であるが、題目を含め大幅に改められている場合もあり、それらの佐々木の編集過程を詳細に見ていくことは容易ではなく、難航している。

また、本研究班のもう一つのねらいは、近代において各私立大学が誕生していく日本の大学史・教育史の流れの中における大谷大学の位置や、佐々木の活動の意義を考えていくことにもある。佐々木は 1921 年に、以前より親交のあった沢柳政太郎を団長とする文部省の欧米視察団の一員として同行し、約一ヶ月間、欧米の宗教・教育事情を視察した。「樹立の精神」には、佐々木が実際にヨーロッパおよびアメリカの教育事情を視察したことに基づく知見が大きく反映されており、こうした背景があって「樹立の精神」は出てきている。こうした視点については、学内外の有識者による公開研究会等の開催によって深めていくことが望まれる。

国際仏教研究

国際的な仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・元教授 井上 尚実
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。

仏教学・宗教学の分野における国際化は新型コロナウイルスの感染拡大による影響を受けた後も、研究活動の形態は多様化しているが、2023年度から、新たな体制のもと、国際仏教研究が古くから取り組んできた「受信」と「発信」の役割を果たし続けている。2024年度はその3年計画の第2年に当たる。2024年の研究活動は以下の4点に集約することができる。

①国際学会・ワークショップへの研究員派遣

カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センターと合同で『歎異抄』翻訳研究ワークショップを継続的に開催した。2024年度は、以下の2回のワークショップが実施された。

- 1) 第13回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ
2024年6月28日(金)～30日(日)龍谷大学
- 2) 第14回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ
2025年3月7日(金)～9日(日)カリフォルニア大学バークレー校 (会場は浄土真宗センター)

第14回のワークショップの詳細については、本所報掲載の参加報告 (p.34) を参照。

そしてワークショッププロジェクトの成果出版の一部として、2024年3月に行われたワークショップにてアマ・ミチヒロ研究員が発表した内容を『真宗総合研究所紀要』に論文として掲載した。詳細は以下の通りである。

Ama Michihiro 著「*Tannishō and Narrativity in the Light of Monogatari and Setsuwa: Creative Aspects of Writing and the Effects of Paradox in Tannishō*」『真宗総合研究所紀要』第42号、49頁～78頁

また国際真宗学会は、パンデミックの影響により、長らく大会を開催されなかったが、2024年9月27日(金)から29日(日)まで龍谷大学の宮キャンパスにて第20回学術大会が催された。研究員3名を派遣し、1名がパネル発表にて歎異抄ワークショップの成果報告を

行ったと共に、1名が個人発表を行った。発表の詳細は以下の通りである。

パネルテーマ「Translating Tannisho commentaries from the Edo Period」(江戸期の『歎異抄』注釈書の翻訳作業について) マイケル・コンウェイ庶務発表「An Introduction to the Commentators and Commentaries」(注釈家と注釈書の紹介)

井上尚実研究代表者「The Enlightenment of King Ajātasatru as the Archetype of the “Attainment of Buddhahood by Evil Persons”」(「悪人成仏」の典型としての阿闍世王の覚醒)

②国際シンポジウム成果出版の準備

2023年12月15日(金)～17日(日)に本学を会場に行われた“Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World’s Religious Traditions” (世界の宗教的伝統におけるさとりと知恵と変容) をテーマとするシンポジウムの成果出版に向けた準備を行った。シンポジウムにおいて世界各国から約30名の研究者を招聘し、研究発表と討議を行ったが、2024年度には、その成果出版の形態について議論を重ね、執筆の依頼内容について検討を進めたと共に、出版社の選定について情報収集を行った。

③「女性と仏教」に関する国際的研究の継続

「女性と仏教」をテーマとする国際的な研究を収集し、データベースの構築を進めたと共に、そのテーマについて研究を続けている者との関係を開拓し、2019年度のワークショップに続くさらなるワークショップの開催に向けて準備を行った。その研究成果の一部を『真宗総合研究所紀要』に資料として掲載した。詳細は以下の通りである。

DASH Shobha Rani と WOO Jongin 著「韓国における「女性と仏教」に関する研究の調査」『真宗総合研究所紀要』第42号、173頁～196頁

④Shinshu Center of America の英訳事業への協力

金子大榮師の『浄土の観念』の英訳プロジェクトについて、出版準備に取りかかった。

東アジア・北アジア仏教研究

仏教を基軸とする東アジア・北アジア学術研究ネットワークの構築

研究代表者・教授 松川 節
(人文情報学・東洋史学)

本研究は、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を発信していくために、アジアにおける仏教研究の動向を把握するとともに、東アジア・北アジアにおいて本学が学術協定を締結している諸機関との共同研究ネットワークを強化し、本学が研究のハブとなってアジア仏教の研究を推進することを目的としており、2024年度は次の3つの研究活動を行なった。

① 出版事業：国際シンポジウム成果論文集および『日本仏教概説（ベトナム語版）』

まず、2015年12月に開催された「中国古代史および敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果論文集については、中国語原稿の翻訳を完了し、現在校正段階にある。また、『日本仏教概説（ベトナム語版）』（Khái lược Phật giáo Nhật Bản）は、ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との学術交流協定に基づく研究成果として、ハノイの社会科学出版社（Nhà xuất bản Khoa học xã hội）より出版された（ISBN: 978-604-364-671-9）。本書の構成は以下の通りである：

序文（織田顕祐研究代表者／宗教研究院院長チユー・ヴァン・トゥアン／翻訳者ファン・ティ・トゥ・ヤーン）

第1章 受容期（宮崎健司）：「仏教の伝来とその受容／国家仏教の成立／光仁・桓武朝の仏教政策」

第2章 展開期（Robert F. Rhodes）：「南都仏教から平安仏教へ／摂関期の仏教／院政期の仏教」

第3章 大成期（織田顕祐）：「鎌倉時代の仏教の特色と新仏教の成立」

第4章 普及期1（川端泰幸）：「南北朝～室町・戦国期における社会変動と仏教の展開」

第5章 普及期2（平野寿則）：「織豊政権下から幕藩体制期の宗教政策と仏教教団、民衆仏教の広がり」

第6章 近代以降（福島栄寿）：「明治・大正・昭和戦前期の仏教と国家、近代仏教の展開」

写真付録、日本仏教史年表

※執筆時点の研究機関名・肩書きを記載

② 中国社会科学院古代史研究所との共同研究

2024年6月7日から11日まで北京市において研究交流が行われた。本学からは松川研究員および井黒忍研究員が参加し、モンゴル語史料や北アジア仏教に関

する情報交換・研究報告・座談会形式による討議を行った。座談会では、井黒が「遼金元代史研究動向」と題して、日本における過去4年間の研究動向を紹介し、松川が「十五世紀蒙語資料研究的現状及展望」と題して、15世紀モンゴル語資料の研究現況と今後の展望を報告した。

さらに、2025年3月16日から20日にかけて、本学にて中国側研究者3名を迎え、共同研究を実施した。3月17日には公開研究会を開催し、以下の研究報告がなされた：

- ・陳麗萍「散在する敦煌文献の整理研究とその将来」
- ・張欣「漢魏時代の長吏と一部の掾史との『型破りな関係』について——『二重君臣関係』説の立論根拠の再検討」
- ・石洋「秦・漢初の律令における『受』字の特殊用法とその源流——あわせて『受』の制度的機能を論じる」

③ モンゴル国立大学と本学との共同現地調査

2024年8月20日から9月16日にかけて、研究テーマ「釈迦如来梅檀瑞像についての共同研究」に基づき、松川研究員はモンゴル国およびロシア連邦ブリヤート共和国において現地調査を行った。

モンゴル国では、ガンダン寺に所蔵されるジャンジャ・ホトクトの著作異本や、ザワー・ダムディンの記述に関する共同研究を進め、現地研究者との意見交換を行った。ブリヤート共和国では、エギトウスキー・ダツァンに伝わる「釈迦如来梅檀瑞像」の視察のほか、ウラン・ウデ市内のロシア科学アカデミー・モンゴル学研究所およびイヴォルガ寺院での調査を実施し、信仰対象としての同像に関する知見を得た。また、モンゴル国立大学・モンゴル科学アカデミーの研究者らと今後の研究体制について協議を行った。

さらに、研究者往来の一環として、以下の研究者を本学に招聘し、公開研究会を実施した。

2024年11月10日～17日：モンゴル国立大学科学学部人文学系・哲学宗教学科教授 S. ヤンジンスレン博士。11月14日の研究会では、「モンゴルと梅檀仏は如何に関係を持ったか」と題する報告が行われ、ブリヤート・エギトウイ寺の梅檀仏像を中心に、その来歴と信仰の位置づけについて、文献と実物資料に基づいた検証がなされた。

2025年2月10日～17日：ガンダンテグチェンリン寺学術文化研究所 研究員・事務局長 N. アムガラン氏。2月12日の研究会では、「モンゴルに流布した梅檀仏信仰」と題する報告が行われ、ジャンジャ・ロールパイドルジヤザワ・ダムディンの著作を中心に、モンゴルおよびブリヤート地域における梅檀仏像の伝播、伝承、関連施設、実際の像の保存状況と口頭伝承の重要性について論じられた。

大学史研究

大学史関係資料の収集・整理・ 管理・保管・研究および清沢満之 研究

研究代表者・准教授 藤元 雅文
(真宗学)

本研究は、【大学史関係資料研究】と【清沢満之研究】とに大きく分かれる。また、活動も、基本的には2班に分かれて行った。

いずれも従来から継続して取り組まれている研究課題であるが、2024年度からは、指定研究として取り組まれてきた清沢満之研究を大学史研究の中に位置づけ、これまでの清沢満之研究をもひきついでいく形での研究組織となった。

以下、【大学史関係資料研究】と【清沢満之研究】とに分けて記す。

【大学史関係資料研究】

月に3~4回程度のミーティングを重ねつつ、主に「大学史に関わる資料の収集・管理・保管体制のルール、方法の検討」に取り組んだ。大学史資料にかかわるチェックリストを作成中である。

その過程で、大学の中心機能である授業に関するデータが最も重要であろうと考えた。そこで、学生支援部教務課から過去のシラバスデータの提供を受けた。このシラバスのデータは csv や pdf という形式で保存されていた。特に csv は汎用性が高いデータ形式である。ここから不用意に一部のデータを抽出するよりも、むしろ既に保存されているデータを確実に継承していく方が重要であろうとの方向性が確認された。

また、2024年度開催の全国大学史資料協議会に研究員が参加して、各大学における大学史編纂の状況や大学史資料の収集などについての知見をえることができた。特に、本研究が2024年度に課題としている電子データ資料については、どのように収集保存するか、多くの大学で課題を感じつつも、どのように取り組むべきか考えあぐねているようであった。

また、研究補助者が、各大学等から寄贈された資料を整理・保存する作業をおこなった。

さらに、特定研究「[大谷大学樹立の精神] 100年」のミーティングに必要なに応じて参加し、三代学長佐々木月樵にかかわる資料の情報共有などに取り組んだ。

【清沢満之研究】

本研究は、清沢満之の生涯と思想を研究する上で、重要な意義を持つ西方寺所蔵文献についての研究とその公開に向けた研究を進めている。

具体的には、次の2点を柱として研究活動を行っている。

- 1、西方寺所蔵文献（未公開分）の研究
- 2、西方寺所蔵文献（未公開分）の公開に向けた研究
西方寺所蔵文献の未公開分は、分量にして36枚撮りフィルム167本分、総文字数3,703,420字である。その中には、清沢満之の生涯全般にわたる文献を確認することができる。2021年度から2023年度までに、その全体について、分野、内容、執筆年代等の基礎的な確認・検討を行い、その全貌について精査する研究を進めた。具体的には、全文献の簡易な解題作成を行い、文献ごとの目次作成を行うことで分野の確定と内容の確認を行った。また、執筆年代が確定できた文献については、『全集』第9巻に収録する清沢満之の年譜に、その情報を加えていく形での作業を行った。また、3カ年の活動開始当初は予定していなかったが、『全集』収録未収録を写真一枚ごとに明確にするリストの作成も完了している。これら3カ年で行った研究成果を踏まえ、2024年度には月1回程度のミーティングを行って追加的な検討を加えたいと、その成果の一部を『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第42号(2025年3月)で公開した。また、解題を含む文献リストについては、研究班の成果として冊子にて限定公開した（『西方寺所蔵清沢満之自筆原稿調査目録』2025年3月）。

上記のように、2023年度までに目標としていた全文献の確認を終え、2024年度には追加的な検討も加えたが、これらはあくまで基礎的研究であり、公開へ向けてはその確度を上げていく研究が、次の段階として、まずは必要となる。その研究を踏まえた上で、公開可能な文献は、順次、研究所の機関誌等で公開していくことを目標とする。これらの研究であきらかにした成果については、これまで同様に西方寺と情報共有を行っていく。また、清沢満之の著述について、未収集文献を調査・収集する活動も継続していく。

仏教写本研究

パーリ語貝葉写本の研究 — 保存、整理、情報収集および ネットワーク構築を中心に —

研究代表者・教授 DASH Shobha Rani
(仏教学)

大谷大学には、パーリ語、サンスクリット語等で書かれた仏教に関する写本が数多く所蔵されている。その一部はある程度整理され、研究が進められているが、未整理で研究が十分に行われていない写本も多く残されている。とりわけ、大谷大学所蔵写本の中には、1900年にタイ王室から寄贈されたと思われる東南アジア諸文字によるパーリ語貝葉写本群が含まれており、これは日本最大級の規模を誇るとされ、研究者から注目を集めている。

本研究の主な目的は、これらの写本の保存と整理と利活用の促進、そして学術研究に資する基盤の整備にある。そのため、貝葉写本の高度なデジタル化作業、所蔵写本のデータベース構築、写本が包まれていたと思われる包み布の調査、関連資料の収集、ローマ字転写テキストや校訂本の作成、翻訳などの作業を中心に進める予定である。その実現に必要な資料の収集も併せて行う。さらに、写本研究を基盤として、南アジア・東南アジアを中心に、その文字、言語、文化、信仰などに関する国際的・学際的な研究を展開するとともに、関連資料の継続的な収集、共同研究の実施、研究者・研究機関とのネットワーク構築を目指すことも目的としている。

このような目的の達成に向けて、2024年度は以下の研究活動を実施した。

① 写本の整理・ローマ字転写テキスト作成

2023年12月に、本学の関係部署より、クメール文字の一部の貝葉写本について、ローマ字転写テキスト(Diplomatic Edition)の刊行および公開の許可が正式に下りた。これを受け、当該写本の画像データの整理を行い、2024年3月より文字入力や写本の内容の比較などの作業がより具体的に開始した。2024年度も引き続きこれらの作業に取り組み、ローマ字転写及び内容比較作業が完了した。完成した転写テキストのデータは、今後研究資料として利用しやすい形式で研究者に提供する予定である。また、2025年3月4日(火)~2025年3月15日(土)にかけてタイへの調査出張を実施し、本研究所との協定機関のDhammachai Instituteを訪問した。現地では、本班嘱託研究員の

Suchada Srisetthaworakul 博士およびその他複数名のネイティブの研究者の協力を得て、当該写本の確認作業を行った。本調査出張の詳細については、本『研究所報』の32-33ページを参照されたい。

② データベース構築

大谷大学図書館により1995年に刊行された『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』(以下、『大谷貝葉目録』と略記)は、既述の本学が所蔵する東南アジア諸文字を使用したパーリ語仏教写本に関する詳細な目録である。本研究では、その目録内容の利便性を高めることを目的として、Excel形式によるデータ入力作業を実施し、すでに完了している。さらに、2023年12月には、本学の関係部署より『大谷貝葉目録』の英語版のデータベースについて公開の許可が下りたことを受け、2024年度はその実現に向けた作業に注力した。英訳作業およびWeb公開のための技術的な準備は、現時点で概ね完了している状態である。

③ ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究

写本研究における総合的かつ先進的な学術的探究および技術・知見の集積を目的として、2021年度よりハイデルベルク大学南アジア文化・宗教史学科(Department of Cultural and Religious History of South Asia)と連携し、「Manuscriptology and Digital Humanities」という共同研究プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトのもと、国際ワークショップや研究発表会などを定期的に開催しており、2024年度はZoomを用いたオンライン形式で計5回の研究会を実施した。

これにより、本プロジェクトのもとで開催された共同研究会は、2024年度までに計25回に達した。

○第1回公開講演会

題名: Buddhist Murals of Kucha on the Northern Silk Road

発表者: Dr. Erik Radisch and Dr. Ines Konczak-Nagel
(Sächsische Akademie der Wissenschaften zu Leipzig)

○第2回公開講演会

題名: Pandit, Samhita, and the digital future of Indology

発表者: Prof. Yigal Bronner
(Hebrew University of Jerusalem)

○第3回公開講演会

題名: Dharmamitra: New Tools for Sanskrit Trans-

lation, Grammatical Analysis, Search and Digital Philology

発表者：Sebastian Nehrlich (UC Berkeley)

○第4回公開講演会

題名：Text Recognition for South Asian Scripts—Using Transkribus

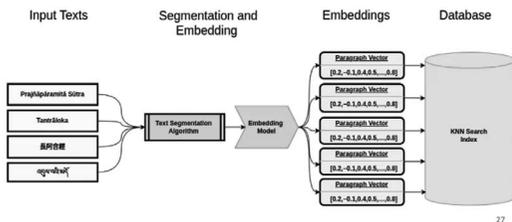
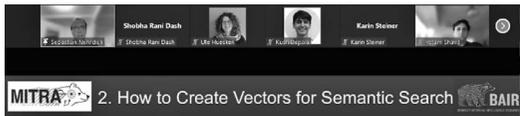
発表者：Nicole Merkel-Hilf and Sowndarya Sriraman (Universität Heidelberg)

○第5回公開講演会

題名：VedaWeb and other Offers by Cologne South Asian Languages and Texts (C-Salt)

発表者：Felix Rau and Claes Neufeind (Cologne Center for eHumanities)

これらの講演の詳細について <https://www.otani.ac.jp/events/sfpjr700001sjdt.html> (大谷大学); <https://www.sai.uni-heidelberg.de/en/departments-and-branches/cultural-and-religious-history-of-south-asia-classical-indology/research/manuscriptology-and-digital-humanities> (ハイデルベルク大学) を参照されたい。



第3回公開講演会のオンライン発表の様子

④ 資料・情報収集

- 上記のタイ出張の際、2022年度に引き続き『大谷貝葉目録』所載の一部の写本について調査を行ったところ、使用文字の記載に誤りがあることを研究者らから再度指摘された。そのため、当該部分について本格的な調査が必要と判断し、今後精査を進めていく予定である。
- Dhammachai Institute の協力のもと、東南アジアの仏教写本に関する多くの情報を継続的に収集することができた。今後、これらの情報を整理・分析し、仏教写本の諸相を明らかにした形での刊行を予定している。
- 現地寺院における調査より、現在研究対象にしてい

る写本の異本が存在することの確認ができたため、研究資料の拡充および比較研究を目的として、今後そのデジタルデータに関連資料として取得する予定である。

- さらに、いくつかの寺院、宗教行事、博物館などを訪問した結果、貝葉写本が単なる文献資料としての役割にとどまらず、宗教的实践においても象徴的かつ重要な位置づけを占めていることが確認された。

⑤ 公開講演会

仏陀の誕生・成道・涅槃を記念する Buddha Purnima の行事に際し、インド・サウンティニケータン所在のヴィスヴァ・バーラティー大学・仏教学センター (Centre for Buddhist Studies, Visva Bharati, Santiniketan) より正式な招聘を受け、2024年5月24日に「South-east Asian Buddhist Manuscripts Research Project at Otani University, Japan」と題するオンライン公開講演を実施した。

本講演においては、本学における東南アジア仏教写本研究プロジェクトの概要とその学術的意義について報告を行い、本研究に関する国際的な研究ネットワークの強化を図った。

⑥ 『大谷貝葉目録』の修正

『大谷貝葉目録』は刊行からすでに相当の年月が経過しているため、その間に蓄積された研究成果や新たに得られた情報に基づき、目録内容の再検討および修正を随時行っている。

⑦ 大阪・関西万博展示への協力

インド政府からの正式な依頼に基づき、2025年に開催される大阪・関西万博のインドパビリオン「 भारत」(Bharat) に対し、本学が協力することとなった。それに伴い、仏教写本に関する知見の一部を広く一般社会に還元すべく、その展示内容及び説明文に向けて準備を進めた。

チベット文献研究

大谷大学所蔵チベット語文献の研究

研究代表者・教授 三宅 伸一郎
(チベット学)

本研究は、本学所蔵の貴重・重要なチベット語文献を、専門の研究者が十分に活用できるような形で研究し、公開することを目的としている。この目的を達成するために、2024年度は以下の研究を行なった。なお、(1)~(3)までは2023年度から継続している研究である。

(1) 蔵外 no.12767 : 『聖大集目連菩薩救母経 (‘Phags pa ‘dus pa chen po byang chub sems dpa’ mo’u ‘gal gyi bus ma la phan btags pa’i mdo)』(写本・127葉)の研究

本経は、目連が地獄に堕ちた母を救う、いわゆる「目連救母説話」を内容としている。「経」と題され、奥書に翻訳者の名前が記されていることから、テキスト自身はサンスクリット語からの翻訳仏典であることを主張している。しかし、(a) 冒頭に掲げられているサンスクリット語タイトルとチベット語タイトルが一致しないこと、(b) 奥書に記されている二人の翻訳者の年代が一致しないこと、(c) 全28章のうち第1章から第4章(2023年度の報告では「第5章」としたが、「第4章」の誤り)までの内容が『宝星陀羅尼経』の冒頭部と一致することなどから、明らかにチベットで選述された「擬経」であると考えられる。同内容のテキストは、国外の研究機関にごくわずかにしか見られない。それゆえ、本学所蔵の本経は、貴重な資料である。この研究では、国外の研究機関に所蔵されている同内容のテキストが未公開である現状を鑑み、本経の公開を目指している。そのために、2023年度はテキスト・データの入力を行った。2024年度は、このデータをもとに、特にその第1章から第4章までの校訂テキストの作成を行った。先述の通りこの部分は、『宝星陀羅尼経』の冒頭部と内容が一致する。そこでこの部分の校訂に際しては、同経のチベット語訳の校訂テキスト(Kurumiya Yenshu, ‘Dus pa chen po rin po che tog gi gzuñs: ‘Dus pa chen po dkon mchog dbal zes bya ba’i gzuñs: Being the Tibetan Translation of the Ratnaketuparivarta. Kyoto: Heirakuji-Shoten, 1979)との対校を行った。両者の間に語句の異同は多いが、本経の読みを採用すべきとする例は少ない。また、本経には『宝星陀羅尼経』に無

い、後に舍利弗となる優波底沙が、後に目連となる俱利多に、釈尊のもとで出家すれば、亡き母の利益となる方法を得ることができると述べるエピソードが付加されている。「救母」というテーマにつなげるための付加であると考えられる。

(2) 蔵外 no.11841 『プトン仏教史』の翻訳研究

14世紀チベットを代表する学者プトン=リンチェンドゥブ(Bu ston Rin chen grub, 1290-1364)により著された『善逝教明示仏教史大宝蔵論 (bDe bar gshegs pa’i bstan pa’i gsal byed chos kyi ‘byung gnas gsung rab rin po che’i mdzod)』通称『プトン仏教史』の第1章仏教概説の部分の和訳研究である。この研究では、2022年に本研究班が公刊した校訂テキスト(Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, Tibetan Works Research Project (2022) *Bu ston’s Introduction to Buddhism: a Critical Edition of First Chapter of the Bu ston chos ‘byung*. Kyoto: Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, 2022)に基づいて和訳研究を行う。2024年度は、[釈尊の]御言葉(bka)の定義と語源を述べる箇所(校訂テキストのpp. 56.6-64.3)の訳註作成作業が完了した。

(3) 『モンゴル仏教史』の翻訳研究

この研究では、2019年に本研究班が刊行したイエシェー・ベルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』(寺本婉雅旧蔵)を、そのモンゴル語版と対照し詳細な注を付した和訳研究を行う。2024年度は、9b6-13a 1の訳註作成を行った。

(4) 研究会の実施

2025年2月10日(月)の11:00~13:00の間、大谷大学響流館4F会議室において、トンドゥブ=ツェリン氏(カレル大学博士課程)を招き、氏が現在研究中の密教経典 *Vajrapañjaramahā* (tib. *rDo rje gur*)のチベット語訳について氏の発表を聞き、その内容に関連する意見交換を行った。

宗教・社会研究

宗教と社会の関係をめぐる 総合的研究 —社会的なものとしての宗教—

研究代表者・准教授 後藤 晴子
(文化人類学・民俗学・社会学)

はじめに

多様な価値観を内包する現代社会において、様々な変化を強いられるなか、宗教のあり方もまた問われている。本研究では、そうした現代社会が内包する諸課題について、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すことを目的としている。2024年度は「社会的なものとしての宗教」をサブテーマに新たに設定し、現代社会における宗教の役割の解明を念頭において課題に取り組んだ。以下、具体的な取り組みと成果を概観する。各活動の詳細については、本所報に掲載されている研究員による活動報告を合わせてご覧いただきたい。

2024年度の活動概要

本研究は、大きく分けると異なるふたつのアプローチから実施している。ひとつが①各研究員が各自のディシプリンを生かしながら研究課題へと接近する取り組みであり、もうひとつが②室長が主導し全研究員が協働で実施する取り組みある。

①の取り組みには、(1) 各研究員を代表とする研究班の取り組みと、(2) 共同課題の検討を目的に各自の専門を生かしつつ、研究員が中心的に企画を担当し実施する公開シンポジウムや公開研究会などがある。

まず(1)としては東京分室では年度初めに、各研究員が各自の研究について発表し、意見交換する機会を設けた。また年度末には東京分室PD研究員個人研究成果報告会を開催し、各研究員がそれぞれ研究発表を実施した(2025年3月3日 於:大谷大学響流館マルチメディア演習室、対面開催)。本研究会は普段は東京を拠点として活動する各研究員が、それぞれの年間を通じた研究活動の一端を報告し、学内の教員に助言を仰ぐ貴重な機会である。2024年度は研究発表で統一し、当日は一楽真学長をはじめ、多数の教員や大学院生の参加があり、限られた時間ではあったが活発な議論が交わされた。

(2)としては、2024年度は公開シンポジウム1回、公開研究会2回に加え、分室としては新たな試みとして学内研究会1回を実施した。

公開シンポジウムは、「書くこと」を通して宗教と社会を考える—語りえないものを「書くこと」の意義に着目して—をテーマに、澤崎瑞央研究員が中心となって実施した(2025年3月2日 於:大谷大学響流館メディアホール、ハイブリット開催)。本シンポジウムは、「書くこと」がどのように宗教や社会と関係しているのかを問いとし、とりわけ宗教的な「書くこと」がどのような営みなのか、またいかなる場合に宗教的な行為となるのかについて議論を重ねることによって、問いの解像度をあげようとする試みであった。この問いは、後述する同じく澤崎研究員が主催した公開研究会で着目したエクリチュール性への関心を発展させたものであり、仏教、キリスト教、イスラームといった異なる宗教を研究対象とする先生方のご報告は、それぞれこの「書くこと」を焦点化した内容で、宗教といった「語り得ないもの」を「書くこと」が社会においてどのような役割を果たすのか、ということを考える上で非常に学び多いものとなった。宗教学関係を中心に多数の参加があり、当日は本学教授・箕浦暁雄氏(大谷大学)のコメント後、活発な議論が交わされた。

次に公開研究会は、2回実施した。ひとつは澤崎研究員が中心となって実施した「仏典からいかに意味を抽出するか—仏典研究再考—」(2024年6月24日、オンライン開催)である(本研究会の詳細は、前号の所報85号を参照のこと)。本研究会では、大乘仏教の起源を巡る問いに対してエクリチュール性に着目する下田正弘氏(武蔵野大学/東京大学)を講師とし、現代を生きる仏教徒が大乘經典を含む仏教經典を受容し信仰する意義を再考することを目的として実施した。下田氏の大乗經典が仏説として受容されるようになった思想過程を問い直す試みは、現代の宗教観を考える上でも大いに示唆を与えられるものであった。本多弘之氏(親鸞仏教センター)のコメント後のオンライン参加者からの質疑では刺激的な議論が交わされた。

もう一つは鶴留正智研究員が中心となって実施した「石牟礼道子の言葉と行為」(2025年3月10日 於:親鸞仏教センター3階講堂、ハイブリット開催)である。本研究会では、水俣で長年フィールドワークを実施してきた飯嶋秀治氏(九州大学)を講師とし、『苦界浄土』で知られる石牟礼道子の言葉と行為について考えることで、水俣病事件から社会問題である公害と宗教の関わりについて考えることを目的とした。これは後述する鶴留研究員が企画した学内研究会に連なるもので、「宗教と水俣病事件」をテーマとする第2弾の企画である。石牟礼は、水俣病事件と宗教の関係について言及し、水俣病の事件の告発において宗教的な

要素を取り入れている一方、「宗教家はひとりもはいてこない」と回顧している。飯嶋氏は一人の人間としての石牟礼に向き合うことの重要性を説くとともに、私たちが他者の困難といかに向き合うかについて自身のフィールドワーク経験や具体的な取り組みから言及した。飯嶋氏の実践的な取り組みは、現代社会と宗教を考える上で大変示唆的なものであり、当日は廣川研究所長も対面参加され、対面オンライン参加者からと活発な質疑と議論が交わされた。(本研究会の詳細は、次号の所報 87 号に掲載予定)

学内研究会としては、「水俣病事件における倫理と宗教-「本願の会」を中心に」をテーマに、鶴留研究員が中心となって実施した(2024年12月13日 於:大谷大学響流館マルチメディア演習室)。本研究会は、「宗教と水俣病事件」に関する第一弾の企画であり、長年水俣病事件と向き合ってきた萩原修子氏(熊本学園大学)を講師とし、倫理と宗教の問題についてとくに「本願の会」の活動を中心に講演いただいた。学内に限った研究会の開催は、東京分室としては初めての試みだが、以前より東京分室では企画に合わせて必ず事前勉強会を実施している。そこでは関係文献の読書会にあわせて、必要に応じて学識者から専門知識の教授をいただいている。本テーマは次年度の企画に向けて今後も展開予定であり、本学関係者と一緒に問題意識を共有していきたいという研究員の希望で学内企画として実施した。萩原氏は緒方正人氏をはじめとする水俣病患者の方々の専門知には回収できない言葉を取り上げながらご講演され、当日は平日夕刻の開催ではあったが廣川研究所長、箕浦主事をはじめ教員や大学院生、公開研究会には参加することが少ない学部学生も参加し、活発な議論が交わされた。(本研究会の詳細は、次号の所報 87 号に掲載予定)

その他、PD 研究員が新たに立案した企画として、藤井麻央研究員がパネリストとして登壇した「第2回西田天香公開研究会 天香をめぐる人物たち-女性・宗教家・画家」2024年12月21日 於:一燈園総寮、ハイブリット開催、基盤研究C「近代日本の宗教思想における女性性の意味と役割:一燈園西田天香資料をベースに」(代表:水野友晴(関西大学))への共催協力がある。本研究会は、宗教と社会をテーマとする東京分室とも関係深い研究会で真宗総合研究所のご尽力により共催とすることができた。当日は後藤が共催挨拶を担当し、同じく共催協力をする南山宗教文化研究所等の他の研究所関係者との意見交換を実施した。

最後に②の取り組みであるが、指定研究の研究課題を検討することを目的とし、全研究員が長崎県平戸・生月への現地調査を実施した(2024年10月12日～

14日)。とくに今年度はキリスト教や仏教、民間信仰が混在する平戸地区において諸宗教と地域社会との関わりの実態を明らかにすることを目的とした。

初日はカトリック田平教会、根獅子にある平戸市切支丹資料館、切支丹墓地と考えられる丸尾山などを巡検し、平戸地区のキリシタン受容のあり方について考察した。二日目は、長崎県平戸市生月町博物館島の館(以下、島の館)の中園成生館長のご厚意で午前中はガスバル様や幸四郎様、御堂などの生月島内のかくれキリシタン関連史跡をご案内いただき、午後は島の館を見学した後、平戸地方におけるかくれキリシタンの歴史や生活に関する中園館長の講義を受けた。また夕刻からは中園館長のご紹介で、かくれキリシタンの信仰を守る川崎雅市氏へのインタビューを行い、かくれキリシタン信仰の一端を伺うことができた。最終日の三日目は、カトリック紐差教会にて紐差教会の司祭のご尽力により長崎・平戸地区のカトリック教会関係者への聞き取りを実施し、カトリック教会の現状やカトリック信徒の生活について具体的な話を伺うことができた。ごく短期間の調査ではあったが関係各氏のご尽力により、長崎における諸宗教と地域社会の関係性の一端を伺い、かつ肌で感じるすることができた。2024年度の成果を手がかりに、東京分室では2025年度も長崎での現地調査を実施予定である。

おわりに

最後に東京分室長としての1年間を振り返ることとする。大谷大学着任3年目での突然の役目に困惑していたが、一楽学長からも前・福島東京分室長からも、「思うようにやっていたら、とお声がけいただいた。また歴代の分室長の先生方や研究員の皆様が築いてこられた基盤と、真宗総合研究所の皆様、研究員たちの熱心さに励まされ、一年間なんとか走ることができたように思う。なによりご登壇いただいた先生方、ご参加いただいた皆様、現地調査でご尽力いただいた関係各氏には、心からの感謝を申し上げたい。東京分室10年目に当たる次年度も各研究員の更なる活躍の一助となるよう微力ながら走り続けていこうと思う。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブの構築

研究代表者・2024年度室長・教授
箕浦 晁雄
(仏教学)

デジタル・アーカイブ資料室の主な目的は、大谷大学が所蔵する貴重な学術資産をデジタル化して、そのデータを整理・保管し、研究資料として公開することにある。

2024年度の主な活動は、大谷大学図書館古典籍データベースの構築である。大谷大学図書館は、約3万部14万冊の古典籍資料を所蔵している。かつては、それら資料の検索には、その時々々に編纂された『大谷大学図書館和漢書分類目録』などの冊子目録が用いられてきた。2010年度より、真宗総合研究所の事業の一環として、古典籍資料の書誌学データベース作成のためのデータ化作業を進めてきた。

書誌情報の採録作業は、綿密な調査を行いながら進め、さらに確認作業を行うという形で行ってきた。この古典籍データベース構築のデータ化作業には、資料名(内題)や著者標目を正確に採る必要があることは言うまでもないが、それに留まらず、その時点で調べられるかぎりの関連情報を付け加えてデータ化している。採取した項目をすべて公開しているわけではないが、作業者の高度な専門的知見によって、他に類を見ない古典籍データベースの構築作業を進めることができている。

2024年度も引き続き書誌情報のデータ化作業を行い、2025年5月23日現在、合計20,722件の書誌情報がデータ化されたことになる。これら古典籍資料の書誌情報データは、大谷大学図書館古典籍データベース(試行版)として公開していて、昨年度も随時更新した。URLは次の通りである。<https://bib.otani.ac.jp/cat/>

なお、試行版とはいえ、データを公開していることで、外部からの資料閲覧の問い合わせを多く受けていて、広く研究者に資するものとなっている。今後もさらにデータベースの精度を高めるための作業を継続する予定である。

2024(令和6)年度「一般研究」(予備研究)研究成果報告

共同研究

ユーラシア東方史における 文献史学・考古学の学融合的研究 にむけた基礎的探究

研究代表者・教授 武田 和哉
(歴史社会学・考古学)

本研究は日本を含むユーラシア東方地域をフィールドとして、その歴史研究に関して文献史学と考古学の協業による学融合に向けた研究を志向し、今年度の予備研究ではそのベースとなるプラットフォームの構築に主眼を置いた研究活動を目指した。具体的には、考古学や文献史学、さらには各種の地理(地形)情報や時代ごとの行政区画などを区別して配置しつつも各種の学術情報の一元的な空間的把握と可視化が可能となるようなシステムの可能性を模索してきた。

本研究の今年度における取り組みはいくつかあり、そのひとつとしては近年の情報処理技術の発展に伴い、近年注目されつつある GIS (=地理空間情報システム: Geographic Information System、以下「GIS」と略称。)を用いての可視化型の情報共有基盤のモデル開発を模索した。既に GIS システムを構築した経験があり、オペレーション操作等に通暁している研究者を招聘して、知識・技術等の移転を図りつつ、さらには京都府内や奈良県内に所在する都城・寺院跡などの史跡地において、遺跡における GPS データの観測と取得の実務手順の確認、観測機器の操作や性能確認なども並行して実施した。

さらに、対象とする地域や時代に関する地理情報や行政区画の範囲、さらには史跡地や文献資料等に見える地名等に紐づいた各種の学術情報の整理と検討などを目的とした史料会読なども定期的で開催して、収録する学術情報データ抽出作業の想定なども行った。最終的には、この研究作業に係る成果の一部として、下記の刊行物を刊行することができた。

成果物名:『遼史訳注稿4 - 景宗本紀-』

〔『遼史』研究成果報告書 第四冊〕[ISSN 2436-8229]

このほか、関連する歴史学・考古学分野の研究会などに参加し、参会の各研究者らと学術情報交換や交流等を行い、本研究の内容や方向性に関する意見交換なども行った。それらによって得た様々な見解や意見等については、今後の研究継続を見据えつつ、計画に反映をさせてゆきたい。



京都府・奈良県内の都城・寺院等史跡での踏査
山城国分寺(史跡恭仁宮跡に所在)塔跡心礎(上)
桜井市談山神社塔(下)

共同研究

仏教を基軸としたチンギス・ハーン世界帝国の研究

研究代表者・教授 松川 節
(人文情報学・東洋史学)

13世紀モンゴル帝国時代の外来宗教(仏教、キリスト教、道教、イスラム教)の中で、モンゴル政権の統治理念に最も大きな影響を与えた仏教を研究対象とし、①チンギス・ハーンは仏教といかなる接点を持っていたか。②13世紀のモンゴル政権はなぜ仏教を統治理念に援用したのか。③モンゴル帝国時代の仏教の理念は、近現代のモンゴル仏教にも継承されたのかという問いに答えるために、モンゴル帝国時代の仏教の諸相を共時的に解明し、モンゴル史上の仏教的統治理念の変遷を通時的に解明することを目的とした。本予備研究ではこのうち①に絞って研究を行った。

1) チンギス・ハーンのオールド移動宮殿の巡検調査

13世紀のユーラシアにモンゴル世界帝国の基盤を築いたチンギス・ハーン(1162~1227)はモンゴル高原に「オールド」と称される移動する宮帳を設置し、后妃を伴ってその間を季節的にもしくは出征の際に移動していた。史料によるとチンギス・ハーンは「四大オールド」を設けており、このうち夏のオールド駐営先「サアリ・ヘール」は、晩年に西夏仏教と接したチンギス・ハーンの葬送儀礼を行った地でもあるため、発掘によって何らかの仏教遺物が出土する可能性がある。今回はそれに先立ち、チンギス・ハーンが設置したとされる「四大オールド」のうち、「ナイマンのオールド」候補地の現地確認を行った。調査はまた、清朝期の駅伝路がオールド間移動路の痕跡を留めている可能性を検証する仮説に基づいて、科研基盤B「清代モンゴル地図の総合的研究」(代表:中村篤志・山形大学教授)との共同で実施された。

8月5日:ウランバートルを出発し、清朝時代の駅伝路をたどりつつオボルハンガイ県・バヤンホンゴル県を經由して645km 走行。バヤンホンゴル市に宿泊。

8月6日:バヤンホンゴル市南方の兵站遺跡「エフテルヒー・バルガス」を調査後、ガロート・ザグ・ゴルワンボラグ・オトゴン郡経由でザブハン県ウリヤスタイ市へ。夜間、オトゴンテンゲル山の西南麓を通過し深夜1時着。

8月7日:ザブハン県イデル郡にて、19世紀ロシアの学者ボズドニエフが記録した仏教寺院址(イラゴグサン・ホトクト寺院址、ハンビィーン・フレー寺院址)を調査。トソンツェンヘル郡に移動し宿泊。

8月8日:ザガスタイ峠からハンガイ山脈越えを試みるも断念。舗装道経由でアルハンガイ県ツァヒル郡に入り、「ナイマンのオールド」候補地およびタリアト寺院址を調査。テルヒン・ツァガーン湖畔泊。

8月9日:エルデネマンダル郡にてハルフル・ハン仏教寺院址を調査。

8月10日:ウルズィート郡の龍城遺蹟、ホトント郡のタミリーン・オラーン・ホシヨ(匈奴墓)を經由し、22時にウランバートルへ帰還。総走行距離は2700kmに及んだ。この巡検は、地理的・歴史的両面からチンギス・ハーンのオールド駐営地の特定に資する重要なフィールド調査であった。

2) チンギス・ハーンの夏のオールドの試掘調査

8月13日08:00 白石典之・新潟大学教授、G.ルンデブ・モンゴル科学アカデミー考古研究所研究員とともにトゥブ県バヤン郡のブールルジュート遺蹟にて試掘調査をおこない、年代比定用サンプル(小型家畜骨)を取得し、19:00ウランバートル市に帰還した。ブールルジュート遺蹟は、チンギス・ハーンの夏のオールド駐営先「サアリ・ヘール」の有力な候補地である。C14放射性炭素年代測定の結果、16世紀以降の年代が検出され、チンギス・ハーンに並行する13世紀前半の年代は検出されなかった。今後の再調査が期待される場所である。

3) チンギス・ハーン崇拜文書の研究

共同研究員の三宅は、モンゴル国立図書館所蔵のチベット語仏典『賢劫経』の奥書が、チンギス・ハーン時代に書かれたものであるとされていることに関連して、大谷大学所蔵の能海寛将来チベット語文献中の同様の形式の紺紙金銀泥写本(チベット蔵外no.12758)との比較研究を行い、松川は同じくモンゴル国立図書館所蔵のタンカ画「チンギス・ハーン仏」についての基礎的研究を行った。

共同研究

奈良時代における仏典の受容と
その深化に関する研究

研究代表者・元教授 宮崎 健司
(日本古代宗教史)

本研究の目的は、奈良時代における仏典の受容実態とその理解の深化を明らかにしようとするものである。具体的には天平勝宝年間(749~57)にあらわれる光明子発願一切経(五月一日経)の勘経に着目し、その実態の解明を通して目的を果たそうとするものである。

研究方法としては、主に三つ、①正倉院文書にみえる勘経関係史料を分析、検討すること、②五月一日経を中心とした奈良朝写経を実地調査し、書誌情報を収集、分析、検討すること、そして③として、①で明らかにした内容を②の実地調査によって知られた知見により跡づけて、勘経の具体的な内容を明らかにしようとするものである。

本年度の主な研究成果は次のとおりである。まず①と③として、大宝積経勘出注文(正倉院文書)を再検討して、その記載内容を現存する五月一日経『大宝積経』の書誌情報に照らして検討したもので、従来、書写時の校生記録とされた本文書を記載内容から天平勝宝年間の『大宝積経』の勘経に係する史料であることを指摘した「大宝積経勘出注文の再検討－五月一日経の勘経をめぐって－」(宮崎健司編『正倉院文書を考える』、法藏館、2024年11月)を発表した。

②の成果として、2022年度東京古典会出品の五月一日経『深密解脱経』巻第一を新出作品として紹介するとともに、そこにみえる墨書が天平勝宝年間の勘経に関する校訂記録であることを指摘した「光明子発願一切経『深密解脱経』巻第一について」(本郷真紹監修、山本崇・毛利憲一編『日本古代の国家・王権と宗教』、法藏館、2024年4月)を発表したほか、次の古写経のさまざまな書誌情報を入手した(含む展観観覧)。

○五月一日経

『放光般若波羅蜜経』巻第三十(Princeton University Firestone Library 蔵)、『光讚般若波羅蜜経』巻第十(Princeton University Firestone Library 蔵)、『華手経』巻第四(静嘉堂文庫美術館蔵)、『仏説中心経』(静嘉堂文庫美術館蔵)、『雑宝藏経』巻第一(阪本龍門文庫蔵)、『開皇三宝録』断簡(静嘉堂文庫美術館蔵)、『衆事分阿毘曇論』巻第十二(Princeton University Firestone Library 蔵)

○善光朱印経

『中阿含経』巻第三十四(五島美術館蔵)

○孝謙天皇発願一切経

『仏説灌頂三帰五戒帯佩護身呪経』(五島美術館蔵)

○既多寺知識経(『大智度論』)

巻三十二(鳥根県立古代出雲歴史博物館蔵)、巻第六十二・六十七(鳥根大学附属図書館蔵)、巻第九十(米国・Harvard Art Museums 蔵)

○隅寺心経(『般若心経』)

Harvard Art Museums 蔵本、阪本龍門文庫蔵本、静嘉堂文庫美術館蔵本

その他に敦煌写経『妙法蓮華経』巻第七(三井記念文庫美術館蔵)、延暦期の「新羅正本」「唐正本」の校訂識語のある『統華嚴経略疏刊定記』巻第五(五島美術館蔵)、藤南家経『法華経提婆達多品第十二』(五島美術館蔵)、陽刻朱方印「積善藤家」をもつ『大般若波羅蜜多経』巻第六十五(個人蔵)を調査した。

また、本研究に関連する成果として、五月一日経に代表される奈良時代の一切経は『開元釈教録』入蔵録を基準としながら、入蔵録の1076部5048巻すべての本経を具備することができず、当該期日本に所在した仏典すべてを集成することが目指されたことが早く指摘されているが、その実態は明らかとはいえない。その点をうかがわせるものとして重要な法隆寺一切経『開元釈教録』巻第十九(大谷大学博物館蔵)の紹介と全文翻刻をした「法隆寺一切経『開元釈教録』巻第十九について」(宮崎健司編『日本古代中世の社会と宗教』、法藏館、2025年3月)を発表した。

さらに米国・Princeton Universityで開催されたSymposium on the Shosoin “Tangible Knowledge: Japan’s Shosoin and the Making of Manuscripts, Treasures, and Archives.”(2025年3月1日)において、宮崎が奈良朝写経の字姿を検討し、草書の古写経の性格を論じた「奈良朝写経の字姿(試論)－草書を中心に－: The Calligraphic Form of Nara-period Copied Sutras (A Preliminary Analysis): Focusing on Grass Script」を、大帥が下級官僚の職務を通じた仏教の広がりを論じた「奈良時代の下級官僚と仏教の広がり: Low-Ranking Officials and Buddhism’s Spread in the Nara Period」を発表した。

今後、五月一日経の実地調査による書誌情報の集積につとめつつ、より五月一日経の勘経の内実に迫っていきたいと考えている。

2024(令和6)年度東京分室 PD 研究員個人研究成果報告

個人研究

現代日本における葬送儀礼と 僧侶に関する研究 — 首都圏の事例を中心に —

研究代表者・元東京分室PD研究員 磯部 美紀
(社会学)

本研究の目的は、現代日本の葬儀に僧侶が関与する意味はいかに見出されるのかを宗教社会学的な観点から明らかにすることである。2024年度は特に、首都圏の開教寺院では葬儀を介して人々との関係構築がいかになされるのかを検討した。具体的には、1990年代に首都圏で宗教活動を開始した浄土真宗 R 寺の事例をもとに、僧侶がいかに今日の死をめぐる状況に対峙しているのかについて、葬儀に着目することで考察した。研究方法は、浄土真宗 R 寺の住職および門徒への聞き取り調査と寺院行事の参与観察から得たデータの分析である。以下ではその概要を示す。

はじめに、「個人化」の概念を補助線にして、死をめぐる現代の状況を宗教・死別・家族の3つの観点から整理すると次のように示せる。まずは「宗教の個人化」により、家代々の宗教から一代限りの宗教への移行が認められる。また「死別の個人化」により、かつては集団内で共有されていた死別の悲しみを、個人がそれぞれ引き受けなければならない事態が進行している。さらに「家族の個人化」の進展により、弔い手のいない「ひとり死」が特殊なものでなくなりつつあり、家墓を次世代に引き継いでいくことも困難になることが、死をめぐる現代の状況として指摘できる。

次に、人口移動と寺院の関係を論じる先行研究を参照する。宗教学者・藤井正雄は「宗教浮動人口」の概念を用いて、人々の移動に伴い寺院をとりまく状況が変化していく様子を分析している。藤井は、都市には特定の寺院との関係を有さない宗教浮動人口が増加する一方、農村は人口流出により従来宗教界を支えてきた農村的基盤の危機に陥り、とりわけ深刻な影響を受けたのは浄土真宗であること、こうした変化を受けて寺院に残された機能は信仰教化の機能と檀徒の先祖供養のための葬儀・法要の機能であることを指摘する。

では、人口移動に伴う変化に対して、都市寺院はどのような課題を認識してきたのか。首都圏における真宗大谷派の動向に注目してみると、人口比において寺院数が不十分であること、人々と平時からの関係を有

さないことなどが課題視されている。こうした課題を受けて始められた活動の一つが都市部における開教寺院の設立である。開教寺院の多くは、既存寺院と異なる地域で展開されてきた。

ここからは、開教寺院の1つである浄土真宗 R 寺の宗教活動を事例にして、前述の死をめぐる現代的状況にいかに僧侶が向き合っているのかを考察する。その結果、次のことが示せる。まず「宗教の個人化」については、門徒以外を含む遺族との向き合い方が焦点になる。先行研究と同様に、R 寺の場合もまた、人々との関係性構築の契機は多くは近親者の死に際した葬儀の機会である。そのため、窓口役となる葬祭業者と良好な関係を築くことができるか、また葬式を縁に出会った人々と継続的な関係を築けるかどうかが鍵となる。人々からの信頼獲得のために R 寺住職が重視したのは、宗教施設の設置と葬儀依頼時の丁寧な対応である。次に、「死別の個人化」に関しては、死者および遺族との向き合い方が重要である。身近な死者を想起する場として、寺院や納骨堂といった宗教施設のほか、死者供養の色彩が濃い寺院行事が機能することもある。また R 寺住職の法話では、浄土真宗の供養観をもとにして、死者と生者の死別後も続く関係性が示されていると言えるだろう。最後に、「家族の個人化」に対しては、遺骨の取り扱い方が焦点になる。R 寺では、納骨堂を設置している。また、門徒のみならず、葬祭業者や福祉施設から依頼される納骨も行っている。これを通して R 寺は、家代々の墓を守る人がいない場合であっても遺骨の行方を不安視せずに済む場を提供している。

反対に、「今日的な死」の状況に対して、僧侶が十分に対応できていない点はどこか。都市開教から30年を経た R 寺の抱える困難の一つは次世代との関係構築である。世代間の継承を前提とせず一代限りの関係を中心に展開してきた寺院だからこそ、既存の寺院以上に次世代との関係構築が困難な状況が見受けられる。また、都市部において人々との関係構築の契機は葬儀・納骨が主であるが、その際に、浄土真宗の教義と「無宗教」性とのバランスをはかることの重要性が浮き彫りになった。

なお、上記の内容は、「寺院における葬儀を介した関係構築—浄土真宗 R 寺に注目して—」(第97回日本社会学会学術大会、2024年11月、於：京都産業大学) というタイトルのもと口頭発表した。

個人研究

中国仏教における不退転の
概念内容の解明

研究代表者・元東京分室PD研究員 澤崎 瑞央
(仏教学)

本研究は、大乘仏教において仏と成る道程からけっして退くことがない段階と想定される「不退転」を主な研究対象としている。とりわけそのような段階が求められた思想背景と、いかなる思想的根拠によって「不退転」の概念が構築されているかを主な問いとして、その概念内容の解明を目的としている。

初期仏教の段階から不退思想は、「正定聚」という、さとりを得ることが決定している人を指すことばと緊密な関係性にあった。さとりを得ることが決定したということは、その段階から退くことがないと言い換えられる。このため、ときには同義のものとして解釈される「正定聚」と不退思想であるが、大乘仏教では、「阿耨多羅三藐三菩提」という大乘仏教特有の概念と緊密な関係を伴いながら、それまでの不退思想とは原語的にも思想的にも異なる不退思想が形成された。

仏教における理想的人間像といえは「ブッダ」その人を指すが、大乘経典では、そのような「ブッダ＝仏」に成ることが確定した行者を「正定聚」や「不退転」という修道的段階を表す語句で示してきた。特に「般若経典」では、仏に成ろうと志す者を「菩薩」と呼び、さらに、『大智度論』では本当の菩薩とは不退転の菩薩であると明示している。このことから、「不退転」とは、大乘仏教徒が目指す仏への道程において、最初の目標に掲げられる段階であり、ある種の目指すべき理想的人間像を示していると考えられる。この「不退転」の語は、多くの大乘経典に用いられており、特に浄土経典においては、極楽浄土への往生と緊密に関連して説かれている。

しかし、なぜこのような段階が求められたのか、また、どのような思想的根拠の基に仏と成る道程から退かないという理論が構築されているのかについては研究の余地を残している。その要因には、主にこの語句が大乘経典において総じて十分な説明がなされずに用いられることや、様々な教義概念と関連して示されることに加えて、一見するとそこに到達することが現実的ではない段階のように思われることが挙げられる。このような不明瞭さを主な要因として、中国仏教では後に「三不退説」や「四不退説」などのさまざまな不退説が形成されていった。このような不退説には、興味深いことに、初期仏教と大乘仏教の不退思想が混交

しており、その点に中国における仏教受容の特徴を見出すことができる。

本研究では、このような中国仏教における不退思想、とりわけ不退転の概念内容の解明を試みるにあたって、「般若経典」に関する最古の注釈書であり、東アジア仏教に多大な影響を与えた『大智度論』を主な対象とした。その影響力に反して、『大智度論』は全百巻に及ぶ大著であることから体系的な分析が施されてきたとは言い難い。そこで、研究代表者は、これまでに見仏の三昧である「般若舟三昧」、成仏の予言である「授記」、そして空の思想とも密接に関連し、法の無生という智慧を備える「無生法忍」などの教義概念と不退転の思想的関係を考察してきた。これらの研究成果から、『大智度論』に示される不退転とは仏と成る過程から退くことがない思想的根拠として、「仏とは何か」、また「真の仏説とは何か」という課題が解決された状態と仮定された。本当の仏および仏説とは何か、という仏教徒の根幹にかかわる問題の解決が、いかなる外的内的影響にも左右されなくなることに緊密に関連していると考えられるためである。

上記の仮定を基に、今年度の研究では、ブッダのことばをいかに正しく受容するかという、ブッダのことばの受容と不退転の関係に着目した。とりわけ、大乘経典に顕著な修道上の行いである「書写」、ブッダのことばを「書くこと」の思想的意義を解明することを試みた。「書くこと」に着目したのは、このような書記技術が、近年提唱された下田正弘氏による大乘仏教起源説の中核を担うためである。書記技術の発展に伴い、大乘経典が作成されたことで大乘仏教教団が形成され始めたという下田正弘氏の説を支えているのが、ブッダのことばを書く行為である。しかし、『大智度論』における「書くこと」は単なる経典の書写に限られず、口頭伝承を書き写すことや他者を雇い書写させることなどが含まれ、複雑で多層的なものがある。本年度は、『大智度論』にみられる「書くこと」と不退転をはじめ、方便や神通力との思想的関係を分析考察した。

上記の研究成果の一部は、日本印度学仏教学会に発表し、さらに『印度学仏教学研究』73巻に論文掲載を予定している。また2025年3月2日に開催した東京分室主催の公開シンポジウム「書くこと」を通して宗教と社会を考える－語りえないものを「書くこと」の意義に着目して－で発表している。

個人研究

外国人支援における宗教に関する研究

研究代表者・東京分室 PD 研究員 高橋 泉
(教育学)

本研究は、外国につながる人々への支援を中心とした社会課題における宗教の役割を検討するものである。特に、外国人集住地域である神奈川県の在日米軍基地周辺地域に着目し、第二次世界大戦後に地域に生じた異文化受け入れに伴う多様な問題の発生とその宗教組織の活動に関する史実の解明を行う。具体的に同地域は、終戦直後には街中への米軍人の進駐を経験し、1950年代には戦災孤児となっていた日米国際児の受け入れ、1980年代にはベトナム戦争の終結によって来日したインドシナ難民数千人の受け入れを行った経験を有する。さらに、1990年以降はいわゆるニューカマーが増加し、同地域の外国人住民比率は現在3%を超える。2024年度は、1950年代の日米国際児の受け入れに関する地域社会史に焦点を当て、特に国際児支援における宗教組織の関与の実態に着目した。具体的に同地域において国際児支援を行ったのはカトリック横浜司教区であり、本研究では、司教区の関係者から提供された資料の調査分析と、支援関係者への聞き取りを基に史実の解明を行った。なおカトリック横浜司教区からは国際児支援施設名公表の許可を得ている。以下では、調査結果の概要を示す。

神奈川における国際児支援は、1946年頃からカトリック横浜司教区の施設を利用して開始されたが、増加する戦災孤児の支援施設の設置に向けて新たに広い敷地を確保する必要があった。後にカトリック横浜司教区は、在日米軍基地周辺地域に約八千坪の土地を購入して支援施設「少年の町」を建設するが、この建設費はローマ法王庁及び米国の枢機卿からの寄付金のほか、横浜のカトリック信者や米軍の宗教関係者からの寄付金により賅われた。なお1954年当時のローマ法王はピオ11世であったが、この時法王庁へ寄付の依頼を行ったのは横浜司教を中心とした日本のカトリック指導者であったことが明らかになった。

次に、施設の運営に関係した組織について述べる。まず少年の町の直接的な管理母体はカトリック横浜司教区であり、いわゆる国内法上の児童養護施設には該当しない。ただカトリック教会では、学齢期を迎えた少年たちに対しては、適切な教育活動が必要であると考えられており、当時の横浜司教からの依頼によって、当時カナダに本部を置いていたカトリックキリス

ト教教育修士会（以下「教育修士会」と略記）から、主に国際児に対する教育面での協力を得た。このため、少年の町の園長は1954年から1969年の間に、三代にわたって教育修士会から派遣されたフランス人やオランダ人等の外国人司祭が務めている。

また1954年東京都世田谷区に教育修士会によって設置されたセント・メアリーズ・インターナショナル・スクールから派遣された修道士の一人は、実際に少年の町に住み込み、国際児に対して日々多様な教育活動を展開した。このほか、日常生活支援や身の回りの世話については、いわゆる世俗修道女であった日本人職員がカトリック横浜司教区の職員として中心的に支援活動を行い、また女子修道会であるお告げの姉妹会の複数名のシスターが東京から派遣され、同姉妹会のシスターらは食事や洗濯などを通じて、少年の町の運営を支えた。こうしてカトリック関係組織による支援活動は、少年の町北東部に位置する神奈川県及び東京都の複数の拠点を中心に展開されたことが明らかになった。

以上の史実からは、カトリック教会は組織のネットワークを駆使して、施設の運営における多様な支援母体を獲得したといえることができる。具体的に言えば、ローマ法王庁からの寄付をはじめ、教育修士会を通じた教育指導、米軍の宗教関係者の経済的援助や交流活動等がその成果であり、これらの宗教ネットワークの存在は、国際児支援を拡充・継続させる基盤となったと考えられる。そして、これらの諸支援活動に際し、施設が運営された約20年の間に亘ってリーダーシップをとったのが、当時のカトリック横浜司教区の司教や、教育修士会の修道士・司祭等、各関係組織の主導者であったといえよう。

上記の研究成果の一部は日本共生科学会で報告し、異文化間教育学会への論文投稿を行った。今後は米軍の宗教関係者に関する調査を予定している。

個人研究

近代民衆宗教の集団と実践 に関する研究

研究代表者・東京分室 PD 研究員 藤井 麻央
(宗教学)

本研究は、近代日本における民衆宗教の展開の解明に向けて、教団、寺院・教会、サークルといった大小さまざまな単位の宗教集団に注目しながら、民衆宗教の実践の一端を明らかにすることを目的とする。

黒住教、天理教、金光教に代表される民衆宗教に対する研究は、教団を特定し、その開教期の教祖、教団、教義を扱う傾向があった。近年になり、教祖以後にあたる明治中期から昭和期の解明も進み始める中、本研究では教団の裾野に広がる多様な活動体による実践をも捉えながら、民衆宗教の展開を明らかにするものである。

2024年度は、金光教の高橋正雄(1887-1965)を中心に据え、高橋の大正期から昭和前期における教団を越境する活動について研究を進めた。高橋は金光教の中心教義とそれに基づく教団論を確立した人物として知られるが、教団活動とは別に個人雑誌『生』の活動等を行い、金光教内外から読者や信奉者を得ていた。高橋と活動を共にした人々は、相互に何に共感し、どのようにネットワークを築き、何を目的に活動を共にしたのか、実証的に明らかにすることを目指した。方法としては、一次資料(雑誌、著作)の収集、データ化、目次のテキストデータ化等を進めながら、それらの資料の分析を行った。

結果として、高橋の教団を越境する活動は、1917(大正6)年に精神的に行き詰まり、「新たな生活」を送る道程において展開し、1929(昭和4)年に創刊した個人雑誌『生』とその読者会的な「生の会」として結実しながら、さらに拡大していったことが明らかになった。その概括や、当該期の高橋の生活に関わる言説については、「宗教と社会」学会第31回学術大会(2024年6月15日)、及び、第83回日本宗教学会(2024年9月15日)にて報告した。

また、高橋の教団外の活動のターニングポイントとして、1917(大正6)年の一燈園・西田天香(1872-1968)との出会い、及び、1921(大正10)年の信徳舎・本城徹心(1873-1932)との出会いがあったと考えられた。以下、この二つの出会いと、それらがもたらした高橋の活動状況について簡単に説明する。

まず、一燈園・西田天香は、修養団体とされる一燈園の創始者であり、高橋と出会った1917(大正6)年

頃は京都鹿ヶ谷に居を構え、托鉢・奉仕行を行っていた。高橋は西田との出会いの直後に決定的な行き詰まりを体験し、我執の放棄、無物の生活といった一燈園の実践を行った。一方、西田は、高橋をはじめとする金光教青年教師と交流しながら、彼らの活動の一つである新生舎・大谷製麺会社等に関心を寄せ、高橋は西田の宣光社構想に関与する一人となった。このような西田と高橋の関係は、第2回西田天香研究会(2024年12月20日)にて報告した。

次に、信徳舎・本城徹心は、愛媛県松山市の真宗僧侶であり、後に還俗して、雑誌『信徳』(後に『正受』と改題)の出版や、集会等を行った。高橋は活字メディアを通じて本城と出会い、臨済宗の照峰馨山とともに、信徳舎の活動に協力した。真宗、金光教、臨済宗と帰属する宗教の異なる三人だが、彼らは生き方を追求するという共通の志向を有し、自らの救済体験や宗教的欲求を相互的・共同的に確認する場として信徳舎の活動を共にしたと考えられた。この信徳舎の活動とその特質については、中外日報に掲載の論文にまとめた。

以上のように、教団の枠組みを越えた交流や実践の諸相が史資料から明らかになりつつある。今後の課題として、高橋と西田の関係について宗教史的観点から考察を深めるとともに、雑誌『生』の読者等の分析を進める。

公開シンポジウム報告(2024. 10. 1～2025. 3. 31)

開催報告 International Symposium “Rabindranath Tagore and Buddhism” (12月8日)

真宗総合研究所事務局

2024年12月8日(日)、在大阪・神戸インド総領事館と大谷大学真宗総合研究所との共催により“Rabindranath Tagore and Buddhism (ラビンドラナート・タゴールと仏教)”と題した国際シンポジウムが開催されました。午前中には尋源館にてオープニングセレモニーを行った後、100年前にタゴールが来学した際に撮影した場所と同じ場所で記念撮影を行いました。



100年前にタゴールが来学した時と同じ場所での記念撮影



100年前の記念写真(タゴール氏:中央の一番背の高い男性)

午後からは、響流館メディアホールにて、Zoom 配信も行いながら、4名の登壇者によるプレゼンテーション、ディスカッション(会場との質疑応答含む)を行いました。登壇者は、Prof. Dr. Shobha Rani Dash (Head, Department of Buddhist Studies, Otani University, Kyoto, Japan)、Prof. Dr. Siddharth Singh (Vice Chancellor, Nava Nalanda Mahavihara, Nalanda, Bihar, India)、Prof. Dr. Eiko Ohira (Department of English Language & Literature, Otsuma Women's University Junior College Division, Tokyo, Japan)、Dr. Dipankar Salui (Faculty Member and Research Supervisor, Department of Sanskrit, Seacom Skills

University, West Bengal, India)の4名でした。(肩書は開催当時)



Prof. Dr. Shobha Rani Dash による発表の様子

また、学術的な交流にとどまらず、本学在學生によるインド国歌(タゴール作)の発表や本学卒業生による日本舞踊の披露を行いました。



ディスカッションと風景本学在學生によるインド国歌の発表

当日、会場には在大阪・神戸インド総領事館のチャンドル・アッパル総領事をはじめ、国内外の多くの来聴者があり、会場との質疑応答では活発な議論が交わされました。

詳細は下記、大学ホームページにてご確認ください。
(<https://www.otani.ac.jp/news/sfpjr700000115ej.html>)

公開シンポジウム開催報告 「書くこと」を通して 宗教と社会を考える－語りえないものを 「書くこと」の意義に着目して－

東京分室長・准教授 後藤 晴子
元東京分室 PD 研究員 磯部 美紀・澤崎 瑞央
東京分室 PD 研究員 鶴留 正智・高橋 泉・藤井 麻央

2025年3月2日(日)に、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、公開シンポジウム「書くこと」を通して宗教と社会を考える－語りえないものを「書くこと」の意義に着目して－を、大谷大学響流館3階メディアホールを会場として、オンライン(Zoom ウェビナー)を併用して、ハイブリッド形式で開催した。

本シンポジウムでは、「書くこと」に焦点を当てて宗教と社会のあり様を再考することを試みた。一概に「書くこと」と言っても、そこには単なる個人の行為に収まりきらない一面がある。「書くこと」には、聖典をはじめ先人や師匠から伝えられた「ことば」を書き写すことや、書き手自身が自己と対話する過程も含まれる。さらには、ことばを「書くこと」を通して、目の前の事実や体験と書いたものが対応関係に無いことに気づき、うまく書けないという経験をした方も多いのではないだろうか。そこには、正確に言語化できない事実、経験、真理といった、いわゆる「語りえないもの」を見出すことができる。もし、そのような「語りえないもの」を書こうと真摯に向かい合えば、さまざまな葛藤が生じることになるだろう。

一方で、「書くこと」にはもうひとつ大きな特性がある。「書くこと」を通してモノとしての書物、テキストが誕生することである。わたしたちが日常的に意思疎通の手段として用いている声としてのことばは、文字化、書かれることを通して、物質化し視覚化される。声としての生きたことばは、書かれることを通して場所、その位相を移し、自分自身とは切り離され、異なるモノとして存在していく。モノとなった書物は、著者が亡くなった後も、時代や地域を越えて他者に読まれ、書かれ、再生産されることによって、時代と地域に限定されない新たな関係を生む媒体となる。本シンポジウムでは、上記のような「書くこと」の特性に焦点を当てて、仏教・イスラーム教・キリスト教のそれぞれの専門家からの視点を踏まえて、宗教と社会のあり様を考え直すことを試みた。

登壇者と発表タイトルは以下の通りである(発表順)。^①澤崎瑞央(大谷大学真宗総合研究所東京分室 PD 研究員)「經典の書写と信仰：ブッダのことばを書く意義に着目して」、^②岡田文弘(身延山大学仏教学部文学・芸術専攻特任講師)「書くこと」から「生まれること」：『法華経』の周辺を探りながら、^③村山木乃実(独立行政法人日本学術振興会特別研究員 PD(東京大学))「自己に向けて「書くこと」：現代イラン宗教的知識人による宗教の再解釈」、^④鍵谷秀之(同志社大学神学部特別任用助手)「語りえないものを語る言葉」を実証的に書きうるか：解釈学的考察」。最初に廣川智貴(真宗総合研究所長)による開会挨拶の後、澤崎瑞央が趣旨説明を行った。続いて四名の発表の後、コメンテーターとして箕浦暁雄(大谷大学文学部仏教学科教授)がコメントを行い、その後に質疑応答を実施した。最後に、後藤晴子(東京分室長)が閉会の挨拶を行った。

当日の登壇者による発表内容とコメントの概要は、以下に示す通りである。^①澤崎瑞央はまず、本シンポジウムの趣旨説明において、「書くこと」に着目した背景に、書記技術が、近年新たに提唱された下田正弘氏による大乘仏教起源説の中核を担う点を紹介・確認した。書記技術の発展に伴い、大乘經典が作成されたことで大乘仏教教団が形成され始めたという下田正弘氏の説を支えているのが、ブッダのことばを書く行為である。ただ趣旨説明では、このような「書くこと」が人文学の最も基礎的な行為であることから、シンポジウムの議論がまともならず困難さを伴うことも同時に指摘した。「書くこと」は、複製、印刷技術、PC、生成 AI など技術の発展と緊密な関係があり、また、「注釈」や「引用」は、過去からことば、伝統を受け継ぐ行為でもある。このような「書くこと」がいかに現在の我々、社会において関連しているのか。それを確かめるために、それぞれの宗教で「語りえないもの」、真理や真実を伝えようとする經典や聖典がどのように書かれているか、さらには、もう一步踏み込ん

で「書くこと」そのものを、当時どのように考えてきたのかを本シンポジウムでは問いとしました。

趣旨説明の後に澤崎は、個人の発表として、仏教文献における「書くこと」がどのような意義をもっていたかを検討するため、オング [1991] やハヴロック [1997] の声と文字の関係に関する研究成果を基に、苦悩からはじまりさとりへと到ったブッダの経験をつたえようとする「ことば」が、仏教徒によっていかに受け止められようとしてきたかを確認した。そして、「書くこと」を通して、人に伝わらない個人的な仏道に陥る危険性を考慮した可能性を論じた。その上で大乘仏典ではブッダの力で書いているという表現がみられることを確認し、その意義を再考する余地があることを指摘した。

②岡田文弘氏は、『大乘涅槃経』の「施身聞偈」の本生譚と『法華経』「薬王菩薩本事品」の関係を指摘した上で、「薬王菩薩本事品」を詳細に検討した。ここでは、イタロ・カルヴィーノの小説に代表されるような自己言及的手法が用いられており、これは『法華経』が「文学作品」として書かれていることを示唆している。さらに、大乘経典と文学作品に着目したCole [2005] が『法華経』が父親たる仏を生み出す父親たる経典という二重性をもつことを指摘していることを踏まえ、岡田氏は、同様の視点をもった人物として日蓮を挙げる。日蓮は、『法華経』が仏の代替であり、仏を出現させる装置であることへの気づきから、経典=題目を仏そのものとして、あるいは仏を生み出す本体として拝するという本尊論を唱えている。ここでは経典を「書くこと」により、仏が生み出される。したがって、このような経典信仰に立つ仏教者にとっては、「書くこと」とは仏を生み、仏に出会い、そして仏に成っていくことに他ならないと岡田氏は述べる。

③村山木乃実氏は、「書くこと」と宗教の密接な関係の一例として、自己に向けて「書くこと」を生きたことと評した、20世紀イランを生きた宗教的知識人、アリー・シャリーアティーに着目した。イラン革命の立役者として知られるシャリーアティーは、どのようなきっかけで自己に向けて書き始め、それを通じて彼がどのように宗教と向き合ったのか。シャリーアティーは、現実世界で他者と分かち合えない孤独を感じていたが、実はそのような孤独が、シャリーアティーを「書く」という行為に向かわせた。「書くこと」を通じて、シャリーアティーは自己の深い部分へと近づき、最終的にイスラームのシーア派に回帰していくが、その過程で彼の思想が既存の宗教の枠組みを超えていくことは特筆すべき点である。孤独と向き合うなかで言葉を紡いだ「沙漠論」は、伝統を突き破る彼の

シーア派の思想の土壌にも、彼の生を支える存在にもなった。一方で、「書くこと」を通じた宗教理解はイスラーム世界では一般的ではないという指摘も忘れてはならない。

④鍵谷秀之氏は、ハイデガー、ガダマー、リケール、シセルトンにおける解釈学思想史を基に、語り得ないものを語ることを実証的に「書くこと」が成り立つかという問題に切り込んだ。ことばが、継承されたものである以上、新たに書いたと思われることばですら、なんらかの文化的蓄積から生じている。この点で、常にことばには、その元になることばの解釈が含まれる。その解釈には、大きく分けて、テキストが字義通りであるか、比喩的・詩的言語であるかというものがある。最終的に、鍵谷氏は「語りえないものを語ることば」は、実証的には書きえず、詩的言語によってのみ書きうる」と述べる。ただそこには恣意的解釈が介在する危険性があるため、実証的な方法における適切な助けが必要となる。

四名の発表を受けて、箕浦暁雄氏は、人間を考える際、どうしても個人的な問題に枠組みを限定してしまう視点に対して「書くこと」が内省的にこのような危機を乗り越える支えとなりうるかを質疑し確認した。さらに「書くこと」が、真実に触れる機会がどのように成り立つかという問題と緊密に関連している点を指摘した。さらにテキスト解釈の方法論と信仰の問題領域のなかで経典をどのように受けとめておくことができるかを確認した。また、シャリーアティーの孤独とはいかなるものかに着目し、森有正を引き合いに、孤独と「書くこと」の関係に切り込んだ。最後に、恣意的解釈に陥らないための「適切な前提」とはどのように決まり、いかなる条件のもとに実証的方法となるのかを確認した。その後には、コメントへのリプライを含め、会場やオンラインからも質疑が飛び交い、活発な議論が展開された。

以上のように本シンポジウムは、多様な宗教の専門家による発表を通して、宗教的な「ことば」を「書くこと」がどのような営みなのかを見つめ直す機会になったと考えられる。

公開研究会・講演会報告(2024. 10. 1~2025. 3. 31)

モンゴル国立大学との公開研究会

東アジア・北アジア仏教研究 研究代表者・教授 松川 節

東アジア・北アジア仏教研究班はモンゴル国立大学との共同研究の一環として2024年11月14日に響流館3階マルチメディア演習室においてモンゴル国立大学より2名の研究員を迎え、公開研究会を開催した。

(1) D. ザヤーバータル (モンゴル国立大学副学長、国際モンゴル学会事務局長) 『『アサラグチ史』という文献の新たな写本について』

『アサラグチ史』は、モンゴルのジャンバによって17世紀に編纂された歴史書であり、これまでにモンゴル国立図書館所蔵写本だけが知られていた。ザヤーバータル博士は、今回新たに確認されたダムディンズレン私邸博物館所蔵の写本を詳細に紹介し、その書誌情報・本文構造・語彙・文法形式・筆写形式の比較分析を通じて、この資料の学術的意義を明らかにした。

報告ではまず、20世紀以降の研究史が整理され、Ya. ツェウエルによる初出(1937)、Kh. ベルレーの移録出版(1960)、H.-R. ケンフェによるドイツ語訳(1983)、Ts. シャグダルスレンおよびイ・ソングユの写本校訂(2002)、D. ザヤーバータル自身による注釈付き翻字と出版(2006, 2011, 2018)など、複数の研究業績が紹介された。

新出原典(私邸博物館本)は、全体で48葉の貝葉写本であり、モンゴル国立図書館本(65葉)と比較して短い。41ページまでは内容が一致しており、以降において省略、追加、訂正、語順変更、注釈挿入など多くの相違点が見られる。特に、モンゴル語の語彙や語尾の変化において、時代的差異が観察されるほか、チンギス・ハーンに関する記述の強調や説明の補筆など、写本の性格に対応した編纂意図が読み取れる。

最終的に、私邸博物館本はモンゴル国立図書館本に比べ後代の写本と位置づけられるが、欠損を含むとはいえ、モンゴル語史や文献学的観点から極めて重要な資料であると結論づけられた。また、モンゴル秘史との関連も示唆され、今後の比較史料研究における基礎資料として注目されるべき存在である。



報告するザヤーバータル博士

(2) S. ヤンジンスレン (モンゴル国立大学科学学部人文系列哲学・宗教学科教授; 本研究班嘱託研究員) 「梅檀釈迦如来瑞像とモンゴルとの関係について」

ヤンジンスレン博士は、まず「梅檀仏」という語の語源と文化的背景について解説した。モンゴル語で Зандан Зуу と呼ばれるこの仏像は、サンスクリット語の「candana (梅檀)」とチベット語の「jo bo (導師、尊者)」に由来する語の組み合わせであり、直訳すれば「梅檀木で作られた尊像」となる。報告では、古来より仏陀が在世中に自身の姿を認めたこととされる聖像として、仏教世界において広く知られる「梅檀仏」が、信仰と伝説の対象として各地にどのように伝播していったのか、その諸形態と展開の差異についても触れられた。特に注目すべきは、ロシア連邦ブリヤート共和国のエゲトウイ寺(Эгитуйский дацан)に伝わる

梅檀仏の存在である。この像は、19世紀末に中国・北京から搬出され、モンゴル仏教徒およびロシア仏教徒の協力のもとでプリヤートに移されたとされる。移転の過程には、当時の政治的混乱——すなわち義和団事件による北京の動乱と、その後の国際的軍事介入——が背景にあった。報告では、アグワーン・ドルジェフらモンゴル僧がこの像の保護に果たした役割、またフランス人宣教師アルフォンス・ファヴィエの仲介、そして五台山経由での移送など、豊富な歴史資料と文献に基づき詳細な再構成が試みられた。

さらにヤンジンスレン博士は、エゲトウイ寺に伝わる梅檀仏像の科学的分析結果にも言及した。伝説ではこの仏像はヴィシュヴァカルマ（梵天の工匠）によって2800年前に造られたとされているが、近年の木材年輪分析等により、実際の制作年代は19世紀末から20世紀初頭であることが明らかにされている。この点については、信仰と科学の相克に対して学術的な見解が提示され、仏教における信仰対象の「真実性」とは何かという哲学的問題も提起された。また博士は、モンゴルにおける梅檀仏像の受容と複製の文化にも注目し、プリヤートの他に清涼寺（日本）、キジギスク寺（プリヤート）などの像と比較しながら、図像・材質・信仰儀礼の違いについて分析を行った。特にモンゴル仏教における「ジョボ／ゾー（Jo bo / Zuu）」信仰の概念が、単なる遺物としての仏像ではなく、儀礼と聖地の連関によって意味を持つものであるという点が強調された。



報告するヤンジンスレン嘱託研究員・博士

結論として博士は、今日における梅檀仏信仰の意義は、単なる宗教遺産にとどまらず、モンゴル仏教徒の歴史的記憶と文化的アイデンティティを象徴する存在であると論じた。そして、エゲトウイ寺の梅檀仏が今なお修復・安置されている事実を、国際仏教交流の具体的な成果と位置づけ、今後さらに宗教文化財としての保存と研究が求められることを述べて報告を締めくくった。

梅檀釈迦牟尼仏に関する公開研究会

東アジア・北アジア仏教研究 研究代表者・教授 松川 節

東アジア・北アジア仏教研究班は梅檀釈迦牟尼仏に関する研究の一環として2025年2月12日に響流館3階マルチメディア演習室においてモンゴル国よりN. アムガラシ師（モンゴル国ガンダンテグチェンリン寺 学術文化研究所研究員・事務局長、本研究班嘱託研究員）を迎え、「モンゴルに流布した梅檀仏信仰」と題して公開研究会を開催した。

本報告は、モンゴルにおける仏教信仰の中でも特に「ゾー仏」（*zyy < Tib. jo bo / 梅檀仏*）に対する信仰の展開と文化的背景を、多数の文献資料・図像・現地調査を基に総合的に明らかにしたものである。報告者は、仏教の伝播をモンゴル史における三段階（古代・大モンゴル帝国期・アルタン・ハーンらによるゲルク派受容期）に分類した上で、ゾー仏信仰が特に後期の展開と密接に関わることを指摘する。

報告では、18世紀チャンキャ・ロールペイドルジによって著されたチベット語文献『梅檀仏の物語と功德について要約した宝珠』を取り上げ、チベット仏教文献においてもゾー仏の靈験と信仰対象としての重要性が語られていることを紹介した。ゾー仏の信仰はラサのジョボ・リンボチュに端を発し、モンゴル各地でその分身や写像が祀られるという形式で発展した。

報告では、モンゴル各地に存在するゾー仏像と寺院のリストが挙げられた。たとえば、フレ（ウランバートル）のガンダンテグチェンリン寺、エルデネ・ゾー寺院、セールのゾー、トーラ河流域のゾーなどが含まれる。また、フフホト（呼和浩特）やオールドスなど、内モンゴル地域にも分布しており、ゾー仏信仰がモンゴル民族全体に広がっていたことを示している。

とりわけ注目されたのは、ブリヤートのエゲトゥイ寺に安置されている梅檀仏像についての記録である。1918年3月27日、モンゴルのボグド・ハーンはこの像が義和団事件後に北京からブリヤートへと流出したものであるとして、再びモンゴルの首都に迎え入れるべく正式な文書を作成し、特使を派遣した。この過程は、信仰対象としてのゾー仏がいかにモンゴル仏教徒にとって重要であったかを物語るものである。

さらに報告は、ザワー・ダムディン（1867-1937）やダヴァ・マーランパ（1904-1977）といったモンゴル仏教界の代表的な高僧たちの伝記的記述にも言及し、彼らの行動や証言の中にゾー仏への深い信仰と、その伝播の実態が現れていることを確認した。とくに

ザワー・ダムディンは、ゾー仏を瞑想対象とし、ゾー仏の靈力を信じて各地を巡ったことが、自伝にも記録されている。



報告するアムガラシ嘱託研究員

最後にアムガラシ氏は、ゾー仏信仰の継承に関するいくつかの課題を提起した。第一に、現存するゾー仏像と寺院の精密な調査と文書化が必要であること。第二に、個人所蔵のゾー仏像についても記録を残し、音声による口承の記録化を進める必要があること。第三に、チベット語・モンゴル語で著された関連文献をより広く検討対象とし、信仰の伝承とその変遷を歴史的に追跡すべきであるとした。

総じて本報告は、モンゴルにおけるゾー仏信仰の多面的展開とその文化的背景を、資料調査・現地調査・文献解釈を交えて明らかにしたものであり、仏教美術・民間信仰・文化遺産保全における貴重な一石となるものである。

真宗総合研究所東京分室 PD 研究員研究報告会

東京分室長・准教授 後藤 晴子
元東京分室 PD 研究員 磯部 美紀・澤崎 瑞央
東京分室 PD 研究員 鶴留 正智・高橋 泉・藤井 麻央

2025年3月3日(月)に、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、大谷大学響流館3階マルチメディア演習室で「真宗総合研究所東京分室 PD 研究員研究報告会」を開催した。各研究員の報告概要は以下の通りである。

①澤崎研究員は、「書記行為と菩薩意識：中国仏教における不退転の概念内容の解明」という題目で発表した。PD 研究員として最後の3年目を迎えたため、本研究がどこを出発点とし、どのような過程を経てきたのか、その進捗について報告した。本研究の基本的なテーマは、副題に掲げた中国仏教における不退転の概念内容の解明である。

本発表では、「不退転」の語句の基本的な意味と、初期仏教における不退思想との意味内容の異なり、さらには三不退説や四不退説など中国仏教における受容形態の特徴について確認した。そして、そのような不退思想の変遷を解明するためには、中国をはじめ東アジア仏教において顕著な影響力を有した「般若経典」の最古の注釈文献である『大智度論』の不退転解釈を分析する必要性を論じた。

その点を踏まえた上で、成果報告会の前日に行われた東京分室主催の公開シンポジウム「書くこと」を通して宗教と社会を考える：語りえないものを「書くこと」の意義に着目して」における「書くこと」と『大智度論』の不退転解釈の思想的関係について改めて言及し、ブッダのことは受け止める行為として「書記行為」に重点が置かれていることを指摘した。加えて、「書くこと」それ自体がブッダの力によって成り立っているという『大智度論』の解釈の思想的根拠を、神通力という教義概念と不退転の関係から明らかにする必要性を論じた。

②鶴留研究員の研究課題は「浄土真宗の古典における理念の研究」である。2024年度は特に『歎異抄』に現れる古典語「き」と「けり」の用例に着目し、現代の多くの現代語訳に存在する問題点を指摘した。

『歎異抄』が親鸞の教えを基軸としていることは多くの『歎異抄』理解の前提であるが、一方で、いくつかのことばについて、それが法然のものであるか、親鸞のものであるか議論がある。本研究会では、2024

年度の学会発表で行った発表をベースに、「法然のことば」であってもそれが「親鸞を経由している」ことを『歎異抄』の著者が示すことを論じた。

加えて、『歎異抄』が親鸞を一師として仰ぐ以上、その尊敬、崇敬感情がどのようなものであるか、つまり無批判な信仰に陥っていないかという問題が生ずる。この問題について、『歎異抄』第二章や第十三章などを中心に改めて論じる余地がありうることを提起した。

③磯部研究員の研究課題は「現代日本における葬送儀礼と僧侶に関する研究」である。本報告会では、東京分室 PD 研究員としての3年間の研究概要を紹介した後、首都圏で1990年代に宗教活動を開始したR寺の事例をもとに、僧侶がいかに今日の死をめぐる状況に対峙しているのかを、葬儀に着目することで明らかにした。研究方法は、浄土真宗R寺の住職および門徒への聞き取り調査と寺院行事の参与観察から得たデータの分析である。

まずは、宗教や死別、家族といった様々な領域で個人化が進展していることに注目しながら、死をめぐる現在の状況を整理した。次いで、人口移動と寺院の関係を論じる先行研究のほか、首都圏における真宗大谷派の取り組みとして開教活動を取り上げ、首都圏における開教寺院の多くは既存寺院と異なる地域で展開されていることを指摘した。その後、浄土真宗R寺の宗教活動について、寺院建立の経緯、門徒との関係、他寺院・葬祭業者との関係、年間行事、法話の5つの観点から示した。最後に、これらを踏まえて、死をめぐる現代的状況にいかん僧侶が向き合っているのかを考察した。都市開教から30年、現在R寺の抱える困難性の一つは次世代との関係性構築である。世代間の継承を前提とせず一代限りの関係を中心にしてきた寺院だからこそ、既存の寺院以上に次世代との関係構築が困難な状況が見受けられる。また、都市部において人々との関係構築の契機は葬儀・納骨が主であるが、その際に浄土真宗の教義と「無宗教」性とのバランスをはかることの重要性が浮き彫りになった。

④藤井研究員の研究課題は、近代日本における民衆宗教の展開の解明に向けて、教団、寺院・教会、サークルといった大小さまざまな単位の宗教集団に注目しな

から、民衆宗教の実践の一端を明らかにすることである。2024年度は金光教の昭和前期を代表する人物・高橋正雄（1887-1965）の教団を越境する活動について研究を進め、その報告を行った。

高橋の教団を越境する活動は、1917（大正6）年に精神的に行き詰まり、「新たな生活」を送る道程において展開し、1929（昭和4）年に創刊した個人雑誌『生』とその読者会的な「生の会」として結実しながら、さらに拡大していった。ターニングポイントとなった一つとして、真宗僧侶で信徳舎という活動を行っていた本城徹心（1873-1932）との出会いを取り上げた。帰属する宗教の異なる彼らは活字メディアを通じて偶発的に出会い、自らの救済体験や宗教的欲求を相互的・共同的に確認する場として、信徳舎における雑誌刊行や集会の活動を共にしたと考えられた。各自の生き方を追求する志向を前にして、帰属する宗教の種類や宗教帰属の有無は大きな意味を持たず、信徳舎は自ずから超宗派の集団となった一方で、主義・主張する運動性に乏しかったことから、既成の宗教活動と共存した。

このような特質をもつ信徳舎のほか、瀬戸内地方には宗教的サークルとも言い得る小集団が重層的に活動しており、宗教帰属を問わない求道者のネットワークの上に、高橋の教団を越境する活動があると考えられた。

⑤高橋研究員の研究課題は「外国人支援における宗教に関する研究」であり、2024年度は、神奈川県内の在日米軍基地周辺地域に着目し、外国人住民の抱える諸課題とその支援における宗教組織の関与の実態について調査を進めた。今回の報告では、特に外国人コミュニティの活動拠点となる宗教組織に焦点を当て、その成立過程と教派的特質、社会課題に対する組織の対応等について、各組織への調査結果を踏まえた考察を発表した。

今回対象とした2つの宗教組織は、戦後在日米軍基地従軍チャプレンの布教によって教会設立し、その後いわゆるメガ・チャーチへと教勢を拡大したいずれもプロテスタント系のキリスト教会である。一つの教会は、主に米軍基地関係者の宗教コミュニティや教育機関として機能していたほか、献金という間接的な支援形態を主に採用しながら、多様な社会課題へ向き合ってきた史実が調査によって明らかになった。

もう一つの教会は、1970年代のベトナム戦争終結によって生じたインドシナ難民の受け入れに伴い、教会施設を開放して難民集會や日本語教室、諸種の生活支援を行ったほか、1990年代以降は主に就労を目的として来日した移民に礼拝施設を貸し出すことで、多

言語礼拝の拠点や地域社会における外国人コミュニティとしても機能した。こうした活動は、教会員の大半が地元地域の住民であるという信徒特性により、地域に生じる共通の社会課題を多様な媒体から認識しやすく、教会が社会に果たすべき役割について、問題当事者の視点から捉えることが可能であったことにより実現したことが考えられた。



中国社会科学院古代史研究所との研究協定に基づく 公開研究会

東アジア・北アジア仏教研究 研究員・教授 井黒 忍

東アジア・北アジア仏教研究班においては、大谷大学真宗総合研究所と中国社会科学院古代史研究所との研究協定に基づき、2025年3月17日に響流館3階マルチメディア演習室において、中国社会科学院古代史研究所より3名の研究員を迎え、公開研究会を開催した。以下、報告者と報告内容の概要を示す。

(1) 陳麗萍（中国社会科学院古代史研究所及び敦煌学研究中心）「散在する敦煌文献の整理研究とその将来」

敦煌文献には、藏経洞から発見された6万点以上の多言語文字文献のほか、中寺塑像、旧城壁、莫高窟北区など莫高窟を中心としたその他の遺跡から出土した遺物や文献も含まれ、広義の敦煌文献という概念を構成している。

敦煌文献の収蔵は、イギリス、フランス、中国、ロシアの四カ国の国家レベルの図書館における収蔵が中心となり、その他の国の公私の機関や個人の収蔵はこれを支える役割を担う。各地に散在する敦煌文献の所蔵数は、中国が第1位、日本が第2位である。羅振玉や施萍婷、榮新江、池田温、藤枝晃などの中日の学者たちは、散在する敦煌文献の調査とその出版に重要な貢献を果たしてきた。中国に散在する敦煌文献は、現在、約50種類の図版が公開されているが、日本に散在する敦煌文献を集成する図版の公開は少なく、大多数の収蔵品はまだ目録や個別の図版を公開するという段階にとどまっている。

日本に散在する敦煌文献の特徴は以下の通りである。第一に、大多数の機関において、敦煌文献とトルファン文献が混在している。第二に、大谷収蔵品を除いて、その他の各地の収蔵品の来歴が極めて複雑である。第三に、収蔵状況が不安定で、流動性が依然として大きい。例えば、中国の競売市場においては、近年、藤井有鄰館や中村素堂、浜田徳海の日収蔵品など、日本の収蔵品の「還流」が多く見られる。

そのため、散在する敦煌文献の今後の整理と刊行に関しては、中日の学者が長期にわたって図版の刊行と関連する目録の編纂を行うとともに、敦煌文献の流動性という問題に注意を払う必要がある。任重く道遠しと言えよう。



(2) 張欣（中国社会科学院古代史研究所）「漢魏時代の長吏と一部の掾史との「型破りな関係」について——「二重君臣関係」説の立論根拠の再検討」

漢魏時代の一部の掾史は、危急の際に白刃を冒して長吏を救い、長吏が刑獄事件に関わった際には自ら責任を取り、長吏が死去した際に「奔喪行服」などの禁を犯すなど「型破りな行動」を行うことがあり、これは過去の学界において「二重君臣関係」の表現と見なされ、主に漢魏時代の掾史の任用方式である辟除制度に起因すると考えられてきた。

しかし、詳細に史料を分析すると、従来の研究におけるいわゆる「二重君臣関係」の立論の根拠は、検証に堪えない可能性があることが分かる。掾史と長吏の間には決して「君臣の義」は存在せず、ましてや「二重君臣関係」などは存在しない。ここに言う「君」や「臣」とは、本質的に皇帝と臣との関係を投影したイメージである。すなわち「君」とは皇権の光を帯びた長吏を指し、「臣」とは皇権に対する臣従を長吏へと転移させることで、「臣」としての虚像を現出させた掾史を指す。

「型破りな行動」は前漢の中・後期から出現し、曹魏時代まで続き、一部の掾史と長吏の間にのみ存在した。これは辟除制度自体とは直接の因果関係はなく、時代の風潮、つまり「士は己を知る者のために死す」など、恩に報いるという先秦社会の風習や觀念の影響を受けたものであり、一部の掾史に対する士や友としての長吏の礼遇やそれによって形成された親密な関係

などが「型破りな行動」を現出させた要因である可能性が高い。漢魏時代の一部の掾史の「型破りな行動」は、官僚機構の正常な所属関係を越えた特殊な関係が長吏と一部の掾史の間に存在していたことを反映している。



(3) 石洋（中国社会科学院古代史研究所）「秦、漢初の律令における「受」字の特殊な用法とその源流——あわせて「受」の制度的機能を論じる」

典籍史料における用法とは異なり、秦と漢初の律令および行政文書においては、「受」はただ「受ける」という意味で用いられた。これに対して「与える」の意味は、「拜」、「除」、「賜」、「賦」、「行」、「付」、「予」、「輸」、「移」、「属」などの動詞で表現された。「受ける」と「与える」を意味する文字が使い分けられた理由は、「受」に「与える」と「受ける」という二つの異なる意味が存在し、これが混乱を招くことを避けるためである。

公文書における「受」の特殊な用法は、少なくとも前4世紀後半に形成された包山楚簡に遡ることができる。楚簡と秦簡の類似性は、それぞれの長期的な文書の実践を通じて蓄積された共通認識によるものである。前漢の前・中期になって、「授」の字が公文書のシステムに入った後も、既存の「受ける」の用語を構造的に変化させることはなかった。

なお、上記の3報告は漢語でなされ、その後に活発な質疑応答が行われた。研究会を通して、最新の研究成果を学ぶとともに、近年の学術動向を知ることができた。

国内研究調査報告 (2024. 10. 1~2025. 3. 31)

国内研究調査出張報告 長崎

東京分室長・准教授 後藤 晴子

元東京分室 PD 研究員 澤崎 瑞央 (10月12日分執筆)・磯部 美紀

東京分室 PD 研究員 藤井麻央 (10月13日分執筆)・鶴留 正智・高橋 泉 (10月14日分執筆)

2024年10月12日(土)から14日(月)にかけて、後藤晴子(東京分室長)・磯部美紀(元PD研究員)・澤崎瑞央(元PD研究員)・鶴留正智(PD研究員)・高橋泉(PD研究員)・藤井麻央(PD研究員)の5名が、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、キリスト教や仏教、民間宗教などが混在する長崎県平戸地区という地域に注目することで、諸宗教と現代社会とのかかわりの実態を明らかにするために、現地調査を実施した。以下では、調査概要を報告する。

1日目である10月12日(土)は、博多から平戸へ移動し、最初にカトリック田平教会を訪れた。カトリック田平教会は、1914年に着任した中田司祭の時代に天主堂建立が計画され、五島、紐差、長崎などからの募金と紐差教会のマトラ司祭の協力のもと工事が始まり、信者の尽力によって1918年にロマネスク様式の荘厳な赤レンガづくりの教会が完成した。九州北部の教会建築の設計及び施工に携わった鉄川与助の最晩年の作品であり、鐘塔を付設した特徴的な構えなど意匠に優れた外観を有している。訪問当初は聞き取りを予定していなかったが、幸運なことにカトリック田平教会の司祭の方からお話を聞く機会に恵まれた。平戸のカトリック信仰の実態や、観光資源としての教会の一面について、さらには江戸時代に追放された「ジャータラ娘」の物語からインドネシアのジャカルタと平戸の国際交友の展望など様々なお話を聞くことができた。また、丸尾山のキリシタン墓地の情報を聞くことができ、予定に組み込み向かうこととした。

カトリック田平教会の次には、根獅子にある平戸市切支丹資料館を訪れた。資料館には近年に新たに寄贈されたかくれキリシタンの展示品が増えており、5年前と比べるとパネルや展示が増えてきているという。ここでも幸いなことに先祖代々地元で暮らしている方からお話を伺うことができた。平戸市切支丹資料館が集落の人びとから聖地としてみなされていた場所に建てられていること、現在でも石祠に参詣する人がいること、さらには根獅子のかくれキリシタンの特徴を地元の方から直接聞くことができた。とりわけ根獅子の特

徴とされる声に出さない「オラシヨ(祈りのこと)」や、仏式儀礼の効用を抑える「経けし」、南の方角を重視する信仰の実態や継承に関する具体的な話を聞くことができたのは、生月のかくれキリシタンの信仰形態と比較する上でも有益なものとなった。

1日目の最後には、カトリック田平教会の司祭の方から情報共有いただいたかつてキリシタン墓地があった丸尾山に赴いた。世界遺産となっている春日集落の棚田を見渡せる頂上にはひとつの石塔が立っている。この場所は、1599年以降のキリシタンの弾圧が激しくなってきたときに放棄されたと考えられており、当時のキリシタン文化の受容のあり方を考察する上で重要な表象となっている。



2024. 10. 12 丸尾山

2日目である10月13日(日)は、長崎県平戸市生月町博物館・島の館(以下、島の館)の中園成生館長の案内のもと、生月島を調査した。午前中は、島内の巡検を行った。かくれキリシタン信仰に関する史跡としては、聖地として知られる黒瀬ノ辻の「ガスバル様」や堺目の「幸四郎様」、里免と焼山にある御堂などを見学した。焼山の御堂では堺目の津元の御前様が祀られ、合同で行事が行われていたが、2024年3月に組が解散したため建物のみが残されており(解体予定)、かくれキリシタン信仰の継承の厳しい状況の一端に触れた。この他、史跡となっている井上氏墓地

と、山田免や前目にある集合墓地などを見学し、生月の墓墓制について理解を深めた。

午後は、島の館の展示の常設コーナーをまわり、かくれキリシタンの信仰具や復元住居（内部）、生月特有の声を出して唱えるオラシヨの映像などを見学した後、当方からの質問を交えながら中園館長よりレクチャーを受けた。内容は主として、生月を中心とした平戸地方におけるかくれキリシタンの歴史と生活についてである。生月の生業は捕鯨を含めた漁業と農業で、かくれキリシタンは主として農業を主体とする壱部、堺目、元触、山田集落に、「垣内」や「津元」と呼ばれる組を構成していた。かくれキリシタンの行事は各家中で行われることが多いが、生月の場合は野外での行事もあり、それらの多くは生業である農耕にかかわる行事であった。生月のかくれキリシタンの信仰は村落共同体と不可分に関係し、禁教以前の信仰形態を継承することから声に出すオラシヨや野外行事などが残り、また、仏教、神道、ハウニンと呼ばれる民間宗教者などの諸宗教の信仰や行事が親和的に併存するなど、外海などとは異なる特徴を示している。このように地域に面的に展開していたが、それゆえに、戦後になり農業の比率が減少して島外に出ていく人が増え人口も減少する中で、組の維持は難しくなっている。組が解散する際、島の館では行事を記録したり信仰具の寄贈を受けたりするなど、かくれキリシタン信仰の様々な資料の保存、及び発信に取り組んでいる。



2024. 10. 13 生月の墓地

夕方には、川崎雅市氏（70代・男性）への聞き取り調査を、生月島壱部のご自宅で中園館長同席のもと行った。川崎氏は、四人兄弟の長男として生まれた。川崎家は祖父の代から3代にわたり、かくれキリシタン信仰の御神体を預かる「津元」にあたり、自宅ではかつて年間50回ほどの行事が行われ、川崎氏は信者らが熱心にお参りする姿を見ながら育った。しかし学校卒業後は島内のまき網漁船の乗組員として遠方に出

漁していたため、40代半ばに船を降りるまでは壱部の自宅を長期であけることもあった。しかし父の他界後、50代に差し掛かる頃にオラシヨを習得して以降、「親父役」と呼ばれる役職者を務めている。

生月島では、主産業であったまき網船と港湾業の衰退により、近年では若者を中心に進学や就職による島外への人口流出が進展している。また少子化の進行により、洗礼を受ける年代にあたる小学生の人数も激減しており、かくれキリシタン信仰の信者数は減少の一途にある。現在、壱部でオラシヨを唱えることができるのは60代以上の4~5名のみであり、後継者不足に伴う世代間継承の困難性が語られた。

ご自宅の居間でひときわ目を引くのは、並置された複数の祭壇である。神棚と仏壇、お大師様の祭壇に加えて、かくれキリシタン信仰の御神体である「お神様（御前様）」の祭壇が連なっている。御前様はかつて、「人目につかないように」と2階の納戸の奥に隠す形で信仰されてきたが、「最近では公になっているから」と20年ほど前に居間へと移したという。こうした祭壇の並置にも象徴される中園（2018）が言うところの「諸宗教の併存状態」は、葬儀のあり様にも示される。すなわち、僧侶を招いて一通り仏式で行うものの、それとは別に信者が集まりオラシヨを唱えて「戻し」と呼ばれる葬礼が行われるという。以上のように、この調査を通して生月島における生活と諸宗教とのかかわりの一端を垣間見ることができた。



2024. 10. 13 島の館・中園成生先生のレクチャー

3日目である10月14日（月）は、カトリック紐差教会において、長崎・平戸地区のカトリック教会関係者への聞き取り調査を実施した。当日は紐差教会からは司祭をはじめ4名、宝亀教会からは2名、田平教会からは1名の信徒、その他の地域住民1名の参加があったが、信徒の中には平戸市の行政関係者を兼ねるものが多数いた。

聞き取りの場では、カトリック信徒家庭における信

仰継承の実態と課題、幼少期からの信仰形成と教会のかかわり、平戸市の観光行政など、多様な地域社会と信徒の諸相が語られた。このうち観光行政に関しては、平戸地区には世界遺産のほか、行政の文化財となっている教会堂が複数存在するが、こうした教会堂が老朽化し、補修工事が必要となった場合には、行政の職員が文化財担当として予算積算の上、補助事業対象となる部分を上級官庁に要求する。この過程では、実際の教会堂使用者であるカトリック信者の意見も取り入れる必要があるため、教会運営を担当する信者でありかつ行政担当者でもある職員がいわば橋渡し役となって職務を担うという。実際、市の幹部職員によれば、平戸市の職員のうち、1~2割程度がカトリック信者だという。

宗教的建造物や集落の文化的景観等の保護が観光振興にも結びつく平戸市にとって、教会運営やかくれキリシタンの実態に詳しい職員の存在は貴重である。こうした職員は、教会ではカトリック信者としてその信仰実践を行うとともに司祭や他の信者の意見に耳を傾け、職場では行政職員として地方自治法や条例等の例規に基づいた観光行政を担うことを可能にするだろう。カトリック教会の日本布教から470年が経過し、その信仰実践が伝統的に継承されてきた平戸市は、こうした宗教的特徴が地域のキリスト教史や自治体運営そのものに影響を与えてきたという地域特性を有すると捉えられる。

また今回、カトリック教会の信徒の生活についてもさまざまな話をうかがった。興味深かったのは、「堅信」に向けての勉強である。カトリック教会では幼児期に洗礼を受けた場合、ある程度成長してから堅信を受ける。堅信というのは、カトリック教会における「7つの秘跡」の一つで、信徒の成人式のようなものである。

カトリック信徒家庭の子どもは、小学生から「教会学校」において教会の教えについて学ぶ。具体的には、教理の解説書である「カテキズム」を中心に、聖書や教会の歴史、聖人の生き方など、様々なものを学習し、教理（教会の教え）を全般的に学ぶようになっている。

話をうかがったカトリック紐差教会、カトリック宝亀教会の信徒は、幼い時期から、教会でその教育を受けたと言う。朝、学校に行く前に司祭などから堅信に向けて教育を受け、堅信を受ける。信徒の方は堅信を「試験」になぞらえる。このような幼児期からの宗教教育、特に一般信徒を宗教施設に集める形での宗教教育は、仏教諸宗派で幼児期から行うというのはまれであるように思われる。また現代においては、カトリッ



2024. 10. 14 カトリック紐差教会

ク教会においても、このような宗教教育はかつてほどには盛んでないと言う。私たちも『カトリックの教え——カトリック教会のカテキズムのまとめ』を一冊いただくことになり、私（PD 研究員・鶴留）も次回、暗記してくるように言われた。通読はしたが、まだ暗記には遠い。宗教の多様なあり方を知るため、宗教間対話のためにも、ぜひとも暗記してまた長崎のカトリック教会を調査訪問したいと思う。



2024. 10. 14 カトリック信徒との座談会

参考文献

中園成生『かくれキリシタンの起源—信仰と信者の実相』弦書房、2018年

海外研究調査報告（2024. 10. 1～2025. 3. 31）

大谷大学貝葉写本研究に関する タイ調査出張

仏教写本研究 研究代表者・教授 DASH Shobha Rani

2025年3月4日(火)～15日(土)の期間中に大谷大学所蔵貝葉写本の Diplomatic Edition 作成作業、現地資料調査、情報収集、現地研究者とのネットワーク構築・懇談および大阪・関西万博展示に関する資料収集・準備を主な目的としてタイへの出張調査を行った。その要点を以下の通り報告する。

① 万博展示資料の準備

本学は、2025年大阪・関西万博のインド館において協力することとなり、本研究班がその業務を担当することになった。これに伴い、関連資料の収集や多言語・文字表記の確認作業を実施した。この確認作業の過程の中で、本学所蔵写本の一部において文字記載に誤りがあることが指摘され、その訂正作業を今後行う予定である。

② Diplomatic Edition の作成作業

2024年度から本格的に開始された本学博物館所蔵の一部の写本の Diplomatic Edition の作成作業を実施した。写本のデータ入力と解読の確認作業を中心に行った。また、バリエーション作成や出版レイアウトなどについても関係者と協議を行った。

③ 現地調査・資料収集・ネットワーク構築

(1) ワット・トン・ノッパクン寺院を訪問し、貝葉写本の壁画目録を確認することができた。調査の結果、当寺院には多くの貝葉仏典が所蔵されており、その中に現在研究中のテーマに関する写本が含まれていることが確認された。それを異本として今後の研究において活用する予定である。さらに、タイの第三級王室寺院であるワット・テプティダラム寺院にも多くの貝葉仏典が所蔵されており、その一部の写本についても調



査を実施することができた。

(2) タイの第一級王室寺院であるワット・プラユラランサワスにおいて、僧侶たちによる仏教作法、特に貝葉写本を用いた仏典の唱え方に関する宗教行事に参加させていただいた。これを通じて、貝葉写本が単なる文献としての役割にとどまらず、宗教的な役割も果たしていることを確認することができた。



(3) マヒドン大学を訪問し、宗教学部長の Dr. Pairor Makcharoen と数名の教員と懇談を行った。訪問に際しては、当大学の教員であり、本班の嘱託研究員でもある Suchada Srisetthaworakul 博士、ならびに当大学講師の Woramat Malasat 博士（報告者が受け入れ教授となり、2025年度から本学に JSPS 外国人特別研究員として所属する）とともに学術懇談を実施した。



(4) アユタヤの博物館を視察し、仏塔内から発掘された金製の貝葉写本の形状をした遺物を確認した。

(5) Woramat 博士のご協力により、ダツマチャイ本山を訪問し、教育部門のチーフである Phramaha Dr Sudham Suratano 長老と懇談する機会を得た。懇談には、Suchada 博士、Woramat 博士、DCI の Bunhchird Chaowarithreonglith 博士も参加し、極めて有意義な意見交換を行うことができた。同寺院には瞑想に関する多くの貝葉写本が所蔵されており、特にパーリ語具

葉仏典に関する共同研究の可能性について積極的な協議が行われた。



(6) DCI 所蔵の上座部仏教写本に関する写真資料の一部を閲覧し、担当スタッフとも意見交換を行った。また、前年度から構想中であるテーマに関する研究会を開催した。共同プロジェクトとして、2025年度より学術協定に基づき具体的な取り組みが開始される予定である。



歎異抄ワークショップ開催・参加報告(2024. 10. 1~2025. 3. 31)

第14回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ参加報告

国際仏教研究・庶務 マイケル・コンウェイ
国際仏教研究・研究補助員 山名 大河
大谷大学大学院修士課程第2学年 高松 英照

第14回『歎異抄』翻訳研究ワークショップは、2025年3月7日(金)から9日(日)までカリフォルニア大学バークレー校の主催によってバークレー市内の浄土真宗センターにて開催された。このワークショップは、本学の真宗総合研究所、龍谷大学の世界仏教文化研究センター、カリフォルニア大学バークレー校の東アジア研究所の三者による学術交流協定に基づいて2017年度から始まったプロジェクトの一環として実施された。

今回のワークショップに参加するために報告者(コンウェイ)は、本学の大学院生2名(修士課程(真宗学専攻)第2学年の山名大河氏と修士課程(真宗学専攻)第1学年の高松英照氏)と木越康研究員とともに3月5日にカリフォルニアに渡った。

3月6日(木)に浄土真宗センターの会議室にて、成果出版に関する打合せを行った。マーク・ブラム(カリフォルニア大学バークレー校教授)嘱託研究員、高満也(龍谷大学教授)氏、木越研究員と報告者の4名が参加し、成果出版の形態について議論をした。そして今後のワークショップ開催のスケジュールを確認した上で、成果出版に関する覚書の作成スケジュールについても確認した。

ワークショップが開催された3日間、4人の出張者は、例によって三つの作業部会で他の参加者と共同して、翻訳作業に取り組んだ。今回のワークショップの参加人数は、20名ほどであった。カリフォルニア大学バークレー校の大学院生と学部生は3名参加し、龍谷大学から大学院生1名、若手教員と研究者3名が参加した。また、他大学の大学院生について、シカゴ大学の修士課程に在籍している学生と、IBSの学生も参加した。

三つの作業部会では、江戸期に作られた『歎異抄』の注釈書を英訳した。マーク・ブラム先生が担当している円智師の『歎異抄私記』の翻訳作業は順調に進み、『歎異抄』第16条と第17条に対する注釈がほぼ完成した。木越研究員が円智部会に基本的に参加し、

円智の注釈内容に関する議論に寄与した。高満也先生が担当している寿国師の『歎異抄可笑記』の作業部会は、第18条の翻訳作業を終えた。コンウェイは、深励師の『歎異抄講林記』の作業部会の統括をした。3日間は、『歎異抄講林記』における『歎異抄』の第16条と第17条の注釈部分の続きについて、予め準備した下訳を検討し、議論を踏まえて修正をした。

若手研究者が、英訳作業の協力をするることによって、今後、仏教学や真宗学に関する研究を国際的に展開できる人物へと育成するが、ワークショップ開催の目的の一つである。そこで、今回のワークショップに参加した本学の2名の大学院生の参加報告を紹介する。



全体会の様子

山名大河氏の報告は次の通りである。

今回、私は初めてのワークショップ参加であり、江戸期の『歎異抄』の講義録の英訳作業を通して、先学がどのように『歎異抄』を引き継ぎ、現代社会において、異なる文化的背景を持つ者たちがどのように理解し、真宗の教えを『歎異抄』から受け止めていく新たな切り口を見つけることが期待された。

私は3日間のうち、2日を円智班、1日を深励班の討論に参加した。まず、円智班では、『歎異抄私記』

の第十六条と第十七条の注釈を中心に英訳の議論が進められた。円智班では、一から英訳を行なっていった。特に、第十六条の英訳を進めていく際に、いくつか英訳の疑問が挙げられた。まず、改悔懺悔について真宗の意を円智が述べている点において、「古へ自力の心に住まりて、出離せざることを悔い悲しむを改悔とも名づけ、懺悔ともいふべし」の「古へ」を「long time/past/long period of time in the past」などどう訳し、またそれはいつのことかという疑問が挙げられた。次に、「仏智」を「buddha-wisdom or buddha's wisdom」のどちらで訳すのか、「～べし」を「should/must/must be」などどのように訳すかなどがあがった。また、「噫」はどのように訳すのかについては、鈴木大拙の『教行信証』訳を参考とするなどした。このように、江戸時代の講義録が英訳される際は専門用語の訳し方の方針などを再確認する必要があると感じられた。また、『歎異抄私記』における第十六条解釈の「一文不通の愚鈍～念仏すべしといえるころなり」は「一枚起請文」と似た文であることから、引用文の原文の確認も必要だと感じられた。

次に深励班でも同様に、『歎異抄講林記』の第十六条と第十七条の注釈を中心に英訳の議論が進められた。深励班では円智班とは異なり、元々英訳されたものを修正していく形態であった。円智班と同様に、英訳を修正していく際に、いくつかの疑問が挙げられた。深励の注釈である「浅聞しきことなり」をどう訳すのかである。これには「mean/shameless/contemptible/despicable/shameful」などが挙げられた。また、「相」の英訳は「form/content/shape」のどれを当てはめるのが適当かなどの議論が交わされた。

最後の討論会においては、円智班、深励班、そして今回参加することができなかった、寿国班（テキスト：『歎異抄可笑記』）の3班の英訳の報告がなされた。

今回のワークショップを通して感じたことは、英語の議論に参加することの難しさである。私は英語のスピーキング能力の不足から、議論を聞き取るので精一杯であり、議論や、英訳の推敲に加わるのが難しかった。そのため、英語をより身近に身につける必要がある。また、私自身、修士課程において『歎異抄』や『歎異抄』の江戸期の講義録を主に扱っていなかったため、扱うことの必要性を痛感した。最後に、今回のワークショップでは、大谷大学大学院生は私を含め2名のみであったのが少し残念であった。

今後も引き続きワークショップに参加して、江戸期の『歎異抄』理解と、英訳される過程で、どのように真宗の教えを『歎異抄』から受け止めていくのかを追っていきたいと思っている。

高松英照氏の報告は次の通りである。

歎異抄 WS において、江戸期の『歎異抄』の注釈書を分析し、英語への翻訳が行われた。私は初めての参加であり、様々な学びがあったと共に言語の壁による議論の難しさも痛感し、自身の課題も見えてきた。以下に今回の活動の報告を行う。

今回の歎異抄 WS では、三つの作業班が設けられ、翻訳作業が進められた。どの班も『歎異抄』第十六条からのスタートであった。

各班によって参考にする書物や先生の着眼点、参加者の視点が異なるため議論は様々な言葉や表現に焦点が当てられ、翻訳における議論が活発であった。まず、Mark Blum 先生の班に参加した時、議論が行われていたのは「ただ ほれほれといえる下はひとえに仏願をたのめば 自然に念仏も相続せらるるなり」という『歎異抄私記』の内容における「ほれほれ」と「仏願をたのむ」の言葉と本文の「おもしろい」、「はからい」をどのように翻訳するのかについてであった。

次に嵩先生の班に参加した時はすでに第十八条に入っており、終わりに近かった。そこでは「未審」や「荒言」、「曾又」など日本語でも現代では用いられなくなった言葉についての議論や議論の中で施入物や布施の行、檀婆羅密という言葉が確かめられた。

コンウェイ先生の班ではコンウェイ先生の翻訳を土台とし、アメリカで20年以上、開教活動を続けてきた桑原先生や、英語を母国語とする方の意見を踏まえ、議論が行われていた。桑原先生は翻訳の中で伝道の視点を踏まえ、現地のメンバーの方々へ伝えることの難しさと文化や受け止め方などアメリカと日本での違いも指摘された。

各班に参加し、同じ『歎異抄』の内容であるが、注釈書や先生、参加者によって議論や用いる単語は様々であった。また、日本の教えや古語を文化や宗教観の異なるアメリカでどのように翻訳するのか。言葉でなく文字によって伝えることの難しさなど翻訳作業の複雑さも今回の WS の参加によって知ることができた。

これまで、ゼミや講義では日本語によって日本の教えを議論していた。しかし今回、アメリカへ行き真宗を議論する場に身を置き、言葉の壁や、宗教観、英語に対する知識など私には見えていなかった視点が多くあることに気が付いた。次回は大谷大学を舞台に歎異抄 WS が開催される。今回見えてきた課題を大切にし、積極的にこの WS に参加したい。

以上の報告からも明らかのように、ワークショップは、参加した学生にとって刺激となり、今後の学びに影響することになるであろう。

真宗総合研究所彙報 2024. 10. 1 ~ 2025. 3. 31

■研究所関係

◇研究所委員会

- 日時：2024年11月13日 12:20~12:50
 場所：響流館4階 会議室
 内容：1. 2025年度真宗総合研究所 事業計画(案)について
 2. 『真宗総合研究所研究紀要』第42号査読・校閲結果について
 3. 中国社会科学院古代史研究所との再協定について
 4. 2024年度研究組織の一部修正について
 5. 2025年度一般研究(予備研究)エントリーについて(報告)
 6. 「タゴール・シンポジウム」開催(12/8)について(報告)
 7. その他
- 日時：2025年1月7日 12:20~12:45
 場所：響流館4階 会議室
 内容：1. 国際シンポジウムについて【報告】
 2. 中国社会科学院古代史研究所の訪問について【報告】
 3. 特定研究Eラーニング研究の動画利用について【報告】
 4. 特別研究員の委嘱について
 5. 協定書の覚書について(歎異抄ワークショップ)
 6. 2025年度PD研究員について
 7. その他
- 日時：2025年3月13日 15:00~15:42
 場所：響流館4階 会議室
 内容：1. 『真宗総合研究所 研究紀要』第42号について(報告)
 2. 2025年度 研究計画(案)について
 3. 特別研究員について
 4. 2025年度 研究所体制(案)について
 5. 一般研究(予備研究)について
 6. 客員研究員について
 7. 研究所事業自己点検・評価について
 8. その他

◇国際シンポジウム

ラビンドラナート・タゴールと仏教
 日時：2024年12月8日

場所：尋源館・響流館4階 メディアホール

■特定研究「大谷大学樹立の精神」100年

- 日時：10月7日 16:30~18:00
 出席者：一楽真、西本祐攝、戸次顕彰、巖城大空
 場所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内容：全集・著作・論文調査に関する情報共有と今後の方針に関する打ち合わせ
- 日時：10月14日 16:30~18:00
 出席者：一楽真、西本祐攝、大艸啓、巖城大空
 場所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内容：全集・著作・論文調査に関する情報共有と今後の方針に関する打ち合わせ
- 日時：10月28日 16:30~18:00
 出席者：一楽真、西本祐攝、大艸啓、戸次顕彰、巖城大空
 場所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内容：今後の方針に関する打ち合わせと意見交換
- 日時：11月18日 16:30~18:00
 出席者：一楽真、西本祐攝、大艸啓、戸次顕彰、巖城大空
 場所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内容：今後の方針に関する打ち合わせと意見交換
- 日時：12月2日 16:30~18:00
 出席者：西本祐攝、大艸啓、巖城大空
 場所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内容：文字起こし原稿の読み合わせと校正
- 日時：12月16日 16:30~18:00
 出席者：一楽真、戸次顕彰
 場所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内容：文字起こし原稿の読み合わせと校正
- 日時：1月6日 16:30~18:00
 出席者：西本祐攝、大艸啓、戸次顕彰
 場所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内容：今後の方針に関する打ち合わせと意見交換
- 日時：1月20日 16:30~18:00
 出席者：一楽真、大艸啓、戸次顕彰、巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：1月27日16:30~18:00
 出席者：一楽真、大艸啓、戸次顕彰
 場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：2月3日16:30~18:00
 出席者：一楽真、西本祐攝、大艸啓、戸次顕彰、巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：2月25日16:30~18:00
 出席者：一楽真、西本祐攝、大艸啓、戸次顕彰
 場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：3月5日16:30~18:00
 出席者：一楽真、戸次顕彰、巖城大空
 場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：3月17日16:30~18:00
 出席者：一楽真、西本祐攝、大艸啓、戸次顕彰、巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：3月24日16:30~18:00
 出席者：一楽真、西本祐攝、大艸啓、戸次顕彰
 場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

■国際仏教研究

【会議】

『歎異抄』ワークショップの成果出版に向けて
 日 時：2024年10月11日14:30~16:30
 場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム
 出席者：マイケル・コンウェイ、マーク・ブラム
 (嘱託研究員)、嵩満也 (龍谷大学教授)

後期の研究活動と2025年度の研究計画について
 日 時：2024年10月15日12:20~13:00
 場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム
 出席者：井上尚実、木越康、新田智通、アマ・ミチ

ヒロ、マイケル・コンウェイ

【出張】

2025年3月5日~11日
 出張先：アメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー市浄土真宗センター
 要 務：第14回『歎異抄』ワークショップ参加および成果出版に関する打合せ
 出張者：木越康、マイケル・コンウェイ、山名大河
 (本学大学院生)、高松英照 (本学大学院生)

■EBS (東方仏教徒協会)

◎EBS 公開セミナー

日 時：2024年10月28日14:40~16:10
 場 所：響流館4階会議室
 講 師：Michael J. Conway

日 時：2024年11月25日14:40~16:10
 場 所：響流館4階会議室
 講 師：Michael J. Conway

日 時：2024年12月16日14:40~16:10
 場 所：響流館4階会議室
 講 師：Michael J. Conway

日 時：2025年1月27日14:40~16:10
 場 所：響流館4階会議室
 講 師：Michael J. Conway

◎EBS 公開講演会

日 時：2024年12月10日18:00~19:30
 場 所：響流館3階マルチメディア演習室 (Zoom)
 講 師：禅僧・花園大学国際禅学研究所研究員
 Thomas Yūhō Kirchner

日 時：2025年3月13日18:00~19:30
 場 所：響流館3階マルチメディア演習室 (Zoom)
 講 師：神奈川大学教授 Brian Ruppert

◎EBS 編集委員会

日 時：2024年12月5日15:30~18:00
 場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム (Zoom)
 出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBleglio、井上尚実、Michael J. Conway、Ama Michihiro、David White、山内美智、筑田一毅、加藤淳、藤枝直子

日 時：2025年2月28日14:00～

場 所：響流館4階会議室 (Skype)

出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBleglio、新田智通、Michael J. Conway、Ama Michihiro、David White、筑田一毅、加藤淳、藤枝直子

◎EBS 編集会議

日 時：2024年11月15日15:00～

場 所：EBS 事務局 (Skype)

出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、井上尚実、新田智通、Michael J. Conway、Ama Michihiro、藤枝直子

日 時：2025年1月28日16:30～

場 所：EBS 事務局 (Skype)

出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、井上尚実、新田智通、Michael J. Conway、Ama Michihiro、藤枝直子

◎EBS 運営委員会

日 時：2025年2月17日13:00～14:00

場 所：響流館4階会議室

出席者：一楽真、平野寿則、速水馨、廣川智貴、箕浦暁雄、山内美智、筑田一毅、加藤淳、Robert F. Rohdes、井上尚実、新田智通、Ama Michihiro、藤枝直子

◎EBS 顧問会議

日 時：2025年3月7日12:00～12:40

場 所：東本願寺宗務所3階第4・5会議室

出席者：木越樹、轡田普善、延澤栄賢、一楽真、廣川智貴、新田智道、Robert F. Rohdes、蒲池誓、小林弘樹、山内美智、筑田一毅、加藤淳、藤枝直子

■東アジア・北アジア仏教研究

【公開研究会】

◇研究会名：「梅檀釈迦如来瑞像とモンゴルの関係について」

日 時：2024年11月14日

場 所：響流館3階マルチメディア演習室

講演者：D. ザヤーバータル博士（モンゴル国立大学副学長）・S. ヤンジンスレン嘱託研究員（モンゴル国立大学科学学部人文系列哲学・宗教学科教授）

出席者：松川節、井黒忍、松浦典弘、箕浦暁雄、宗

周太郎、A. ボルマー、三宅伸一郎

◇研究会名：「モンゴルに流布した梅檀仏信仰」

日 時：2025年2月12日

場 所：響流館3階マルチメディア演習室

講演者：N. アムガラシ嘱託研究員（ガンダンテグチェンリン寺・学術文化研究所学術事務局長、研究員）

出席者：松川節、井黒忍、松浦典弘、箕浦暁雄、宗周太郎、A. ボルマー、三宅伸一郎

◇研究会名：「中国社会科学院古代史研究所との共同研究」

日 時：2025年3月17日

場 所：響流館3階マルチメディア演習室

講演者：陳麗萍（中国社会科学院古代史研究所研究員）、張欣（中国社会科学院古代史研究所研究員）、石洋（中国社会科学院古代史研究所研究員）

出席者：松川節、井黒忍、松浦典弘、宗周太郎

■仏教写本研究

【ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究プロジェクト公開研究発表会】

◇第23回

日 時：2024年11月22日

発表者：Sebastian Nehrdich (UC Berkeley)

会 場：オンライン (Zoom)

発表題名：Dharmamitra: New Tools for Sanskrit Translation, Grammatical Analysis, Search and Digital Philology

◇第24回

日 時：2024年11月29日

発表者：Nicole Merkel-Hilf and Sowndarya Sriraman (Universität Heidelberg)

会 場：オンライン (Zoom)

発表題名：Text Recognition for South Asian Scripts —Using Transkribus

◇第25回

日 時：2024年12月13日

発表者：Felix Rau and Claes Neufeind (Cologne Center for eHumanities)

会 場：オンライン (Zoom)

発表題名：VedaWeb and other Offers by Cologne South Asian Languages and Texts (C-Salt)

【海外出張】

日 時：2025年3月4日(火)～15日(土)
 出張先：バンコク、アユタヤ (タイ)
 出張者：ダシュ・ショバ・ラニ (本班研究員・代表者)
 Suchada Srisetthaworakul
 (本班嘱託研究員・Mahidol 大学講師)
 要 務：大谷大学所蔵写本の研究、現地資料調査、
 情報収集、現地研究者とのネットワーク構
 築、大阪・関西万博展示に関する資料収
 集・準備

【ミーティング・情報交換】

◇第1回

日 時：2024年10月4日 16:00～18:00
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
 Dr. David Wharton (Singapore Univer-
 sity of Technology and Design)
 場 所：オンライン (Zoom)
 内 容：インド・東北地方の仏教写本に関する情報
 収集

◇第2回

日 時：2024年11月22日 21:30～23:30
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
 Dr. Anand Mishra
 (Heidelberg University, 本班嘱託研究員)
 宇野ヒカル (本班研究補助者)
 場 所：オンライン (Zoom)
 内 容：目録データベース構築作業

◇第3回

日 時：2024年11月26日 13:00～15:00
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
 Dr. Anirban Dash (Director, NMM)
 場 所：オンライン (Zoom)
 内 容：インド系文字の研究に関する打ち合わせ

◇第4回

日 時：2025年1月21日 16:00～17:00
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
 Dr. Suchada Srisetthaworakul
 (Mahidol University, 本班嘱託研究員)
 場 所：オンライン (Zoom)
 内 容：タイ出張に関する打ち合わせ、入力作業の
 進展確認など

◇第5回

日 時：2025年1月25日 18:30～20:30
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
 Dr. Anand Mishra
 (Heidelberg University, 本班嘱託研究員)
 場 所：オンライン (Zoom)
 内 容：目録データベース構築作業

◇第6回

日 時：2025年2月12日 16:00～18:00
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
 筑田一毅 (大谷大学教育研究支援課)
 中島晶子 (大谷大学教育研究支援課)
 Priyanka Mishra (インド・IGNCA)
 Nishant (インド・IGNCA)
 Samit Garg (万博インド館関係者)
 Abhishek Kamboj (万博インド館関係者)
 内 容：大阪・関西万博インド館における展示に関
 する打ち合わせ

◇第7回

日 時：2025年2月14日 17:30～19:30
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
 筑田一毅 (大谷大学教育研究支援課)
 中島晶子 (大谷大学教育研究支援課)
 Samit Garg (万博インド館関係者)
 Abhishek Kamboj (万博インド館関係者)
 場 所：大谷大学響流館 4F 会議室
 内 容：大阪・関西万博インド館における展示に関
 する打ち合わせ

◇第8回

日 時：2025年3月2日 22:00～00:30
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
 Dr. Anand Mishra
 (Heidelberg University, 本班嘱託研究員)
 場 所：オンライン (Zoom)
 内 容：目録データベース構築作業

◇第9回

日 時：2025年3月22日 23:00～01:30
 出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
 Dr. Anand Mishra
 (Heidelberg University, 本班嘱託研究員)
 宇野ヒカル (本班研究補助者)
 場 所：オンライン (Zoom)
 内 容：目録データベース構築作業

■大学史研究

【出張】

◇2024年10月2日～3日

出張先：早稲田大学 小野記念講堂

要 務：大学史資料協議会全国研究会

出張者：藤元雅文（10月2日）、采翠晃（10月3日）

【大学史関係資料研究・ミーティング】

◇研究会・打合

日 時：10月4日

場 所：仏教教育センター

出席者：藤元雅文・采翠晃

◇研究会・打合

日 時：10月8日

場 所：仏教教育センター

出席者：藤元雅文・采翠晃

◇研究会・打合

日 時：10月22日

場 所：仏教教育センター

出席者：藤元雅文・采翠晃

◇研究会・打合

日 時：10月29日

場 所：仏教教育センター

出席者：藤元雅文・采翠晃

◇研究会・打合

日 時：11月5日

場 所：仏教教育センター

出席者：藤元雅文・采翠晃

◇研究会・打合

日 時：11月12日

場 所：仏教教育センター

出席者：藤元雅文・采翠晃

◇研究会・打合

日 時：12月3日

場 所：仏教教育センター

出席者：藤元雅文・采翠晃

◇研究会・打合

日 時：12月10日

場 所：仏教教育センター

出席者：藤元雅文・采翠晃

◇研究会・打合

日 時：3月18日

場 所：仏教教育センター

出席者：藤元雅文・采翠晃

【清沢満之研究・ミーティング】

◇第1回

日 時：2024年10月10日 14:40～16:10

出席者：西尾浩二、藤井了興、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：出版予定リストの作業進捗の報告

◇第2回

日 時：2024年10月24日 14:40～16:10

出席者：西尾浩二、藤井了興、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：出版予定リストの作業担当範囲の確認

◇第3回

日 時：2024年12月10日 16:20～17:50

出席者：西尾浩二、藤井了興、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：出版予定リストの作業進捗の報告

◇第4回

日 時：2025年1月8日 15:00～16:30

出席者：西尾浩二、藤井了興、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：リスト出版の日程の確認

◇第5回

日 時：2025年2月14日 14:00～15:30

出席者：西尾浩二、西本祐攝、藤井了興、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：出版予定リストの作業日程の調整

◇第6回

日 時：2025年2月22日 10:00～13:00

出席者：西尾浩二、西本祐攝、藤井了興、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：出版予定リストの印刷工程の確認

◇第7回

日 時：2025年3月5日 10:00～13:00

出席者：西尾浩二、西本祐攝、藤井了興、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：リスト最終稿の作成

◇第8回

日 時：2025年3月6日 14:00～15:00
 出席者：西尾浩二、西本祐攝、藤井了興、山雄優生
 会場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
 目的：リスト最終稿の確認および印刷

■チベット文献研究

【研究会】

◇密教経典 *Vajrapañjaramahā* (tib. *rDo rje gur*) の
 サンスクリット写本の研究
 日 時：2025年2月10日 11:00～13:00
 会場：大谷大学響流館4F 会議室
 講演者：トンドゥブ=ツェリン (Don grub tshe
 ring) 氏 (カレル大学博士課程)
 出席者：三宅伸一郎、上野牧生 ほか学生3名

■宗教・社会研究

【出張】

◇2024年10月11日～14日
 出張先：長崎県平戸・生月地区 (カトリック田平教会、同紐差教会、平戸市切支丹資料館、平戸市生月町博物館島の館、かくれキリシタン川崎様宅他)
 要 務：共同研究テーマ「宗教と社会の関係をめぐる総合的研究－社会的なものとしての宗教－」に関わる調査の実施
 出張者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

◇2025年3月2日～3日
 出張先：大谷大学
 要 務：公開シンポジウム、PD 研究員の研究成果報告
 出張者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

【学内研究会】

◇水俣病事件における倫理と宗教－「本願の会」を中心に
 日 時：2024年12月13日
 場 所：大谷大学
 講演者：萩原修子 (熊本学園大学 教授)
 出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

【公開シンポジウム】

◇「書くこと」を通して宗教と社会を考える－語りえ

ないものを「書くこと」の意義に着目して－

日 時：2025年3月2日
 場 所：大谷大学+オンライン
 講演者：岡田文弘 (身延山大学仏教学部文学・芸術専攻 特任講師)、村山木乃実 (独立行政法人日本学術振興会 特別研究員 PD (東京大学))、鍵谷秀之 (同志社大学神学部 特別任用助手)、箕浦暁雄 (大谷大学文学部仏教学科教授)
 出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

【公開研究会】

◇石牟礼道子の言葉と行為
 日 時：2025年3月10日
 場 所：親鸞仏教センター3階会議室+オンライン
 講演者：飯嶋秀治 (九州大学 教授)
 出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

【ミーティング】

◇第10回
 日 時：2024年10月7日 13:00～14:00
 場 所：真宗総合研究所東京分室+オンライン
 出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
 内 容：指定研究調査の最終確認

◇第11回
 日 時：2024年10月28日 13:00～17:00
 場 所：真宗総合研究所東京分室
 出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
 内 容：指定研究調査の振り返り、研究会とシンポジウムの企画

◇第12回
 日 時：2024年11月18日 13:00～17:00
 場 所：真宗総合研究所東京分室
 出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
 内 容：学内研究会に向けた作業と事前勉強会

◇第13回
 日 時：2024年12月2日 13:00～17:00
 場 所：真宗総合研究所東京分室
 出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正

智、高橋泉、藤井麻央

内 容：学内研究会に向けた最終調整と事前勉強会

◇第14回

日 時：2024年12月23日10:30～15:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

内 容：学内研究会の振り返り、シンポジウムと研究会の企画

◇第15回

日 時：2025年1月20日13:00～15:00

場 所：真宗総合研究所東京分室+オンライン

出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

内 容：シンポジウムと公開研究会に向けた調整

◇第16回

日 時：2025年1月27日13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：後藤晴子、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

内 容：シンポジウムと公開研究会に向けた調整と事前勉強会

◇第17回

日 時：2025年2月3日13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

内 容：シンポジウムと公開研究会に向けた調整と事前勉強会

◇第18回

日 時：2025年2月17日13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

内 容：シンポジウムに向けた最終調整と事前勉強会

◇第19回

日 時：2025年3月24日13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

内 容：シンポジウムと研究会の振り返り、所報の確認

■個人研究 磯部美紀班

【学会・研究会等参加】

◇東洋英和女学院大学大学院死生学研究所第5回公開連続講座

日 時：2024年10月5日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：磯部美紀

◇東洋英和女学院大学大学院死生学研究所シンポジウム「死別と死者との絆-悲嘆のプロセスをめぐって-」

日 時：2024年10月19日

場 所：オンライン

要 務：シンポジウム参加

参 加 者：磯部美紀

◇日本社会学会第97回学術大会

日 時：2024年11月9日～10日

場 所：京都産業大学

要 務：学会発表

参 加 者：磯部美紀

◇東洋英和女学院大学大学院死生学研究所第6回公開連続講座

日 時：2024年11月16日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：磯部美紀

◇沖縄県メモリアル整備協会設立30周年記念シンポジウム

日 時：2024年11月30日

場 所：オンライン

要 務：シンポジウム参加

◇JARS 第3回 Online Guest Talk

日 時：2024年12月14日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：磯部美紀

◇第120回歴博フォーラム「超高齢社会における葬墓制の再構築をめざして」

日 時：2024年12月21日
場 所：一橋大学一橋講堂
要 務：フォーラム参加
参 加 者：磯部美紀

◇浄土宗総合研究所公開シンポジウム「墓じまいを考
える」

日 時：2025年2月10日
場 所：大本山増上寺光摂殿
要 務：シンポジウム参加
参 加 者：磯部美紀

◇関西社会学会若手企画「死の社会学」研究会

日 時：2025年2月15日
場 所：オンライン
要 務：研究会発表
参 加 者：磯部美紀

◇南山宗教文化研究所孝本貢文庫シンポジウム

日 時：2025年2月25日
場 所：オンライン
要 務：シンポジウム参加
参 加 者：磯部美紀

◇東北大学知識行動オープン・プラットフォーム
SOKAP-Seeds「サステイナブルな日本型吊いシス
テムの構想に向けた基礎研究」第1回吊いと建築研
究会

日 時：2025年2月28日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参 加 者：磯部美紀

◇関西社会学会若手企画「家族実践の社会学」研究会
第3回公開研究会

日 時：2025年3月11日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参 加 者：磯部美紀

◇関西社会学会若手企画「死の社会学」研究会公開シ
ンポジウム「『死の社会学』の現在地」

日 時：2025年3月22日
場 所：甲南大学岡本キャンパス
要 務：討論者としてシンポジウム参加
参 加 者：磯部美紀

【出張】

◇2024年9月27日
出 張 先：大谷大学
要 務：資料収集、専門的知識の提供
出 張 者：磯部美紀

◇2025年3月4日
出 張 先：京都府立大学、大谷大学
要 務：資料収集、専門的知識の提供
出 張 者：磯部美紀

◇2025年3月9日
出 張 先：特別養護老人ホームさつまの里
要 務：施設見学
出 張 者：磯部美紀

◇2025年3月15日
出 張 先：メディカルシェアハウス・アマターバ
要 務：施設見学
出 張 者：磯部美紀

◇2025年3月21日
出 張 先：大谷大学
要 務：専門的知識の提供
出 張 者：磯部美紀

■個人研究 澤崎瑞央

【学会発表・研究会参加】

◇般若経研究会（発表者：宮崎展昌「大智度論諸本研
究序説－巻品構成からみた諸本の相互関係に関する
予備的考察－」）

日 時：2024年10月25日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参 加 者：澤崎瑞央

◇宮治昭名誉教授特別講演会「シルクロードの仏教美
術に見る異宗教との融合－ガンダーラとバーミヤン
の弥勒信仰を中心に、クチャ・敦煌・日本へ－」

日 時：2024年10月28日
場 所：国際仏教学大学院大学
要 務：講演会、意見交換会参加
参 加 者：澤崎瑞央

◇浄土宗教学院公開講座

日 時：2025年2月7日
場 所：オンライン

要 務：研究会参加
参 加 者：澤崎瑞央

◇浄土宗総合研究所（東京）シンポジウム「墓じまい」を考える

日 時：2025年2月10日
場 所：オンライン
要 務：シンポジウム参加
参 加 者：澤崎瑞央

◇【浄土宗教学院】東部研究会（発表者：倉本尚徳「新出墓誌にみる善導浄土教の臨終行儀－道宣著作等との比較から－」）

日 時：2025年3月13日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参 加 者：澤崎瑞央

◇東海印度学仏教学会 2024 年度例会（発表者：箕輪 顕量「仏教瞑想とマインドフルネス－その歴史的展開について－」）

日 時：2025年2月13日
場 所：同朋大学
要 務：研究会参加
参 加 者：澤崎瑞央

◇ヤン・ヴァン・ブラフト先生記念レクチャー・シリーズ 第1回 寺尾寿芳先生講演会

日 時：2025年2月18日
場 所：オンライン
要 務：講演会参加
参 加 者：澤崎瑞央

◇シンポジウム「三大宗教の実践的対話に向けて－仏教・イスラーム・キリスト教の比較考察」

日 時：2025年3月1日
場 所：龍谷大学
要 務：シンポジウム参加
参 加 者：澤崎瑞央

【出張】

◇2025年2月13, 14日
出 張 先：同朋大学
要 務：研究会参加、専門的知識の提供
出 張 者：澤崎瑞央

◇2025年3月14, 15日

出 張 先：大谷大学
要 務：資料収集、専門的知識の提供
出 張 者：澤崎瑞央

◇2025年3月27日

出 張 先：同朋大学
要 務：資料収集、専門的知識の提供
出 張 者：澤崎瑞央

■個人研究 鶴留正智班

【研究会参加】

◇親鸞仏教センター定期研究会

日 時：10月29日
場 所：親鸞仏教センター
要 務：研究会参加
出 席 者：鶴留正智

◇親鸞仏教センター定期研究会

日 時：11月25日
場 所：親鸞仏教センター
要 務：研究会参加
出 席 者：鶴留正智

◇親鸞仏教センター定期研究会

日 時：12月27日
場 所：親鸞仏教センター
要 務：研究会参加
出 席 者：鶴留正智

■個人研究 高橋泉班

【学会発表・研究会参加】

◇移民政策学会 2024 年度冬季大会

日 時：12月7日～8日
場 所：南山大学
要 務：学会参加、研究発表
出 席 者：高橋泉

◇国際ボランティア学会第26回大会

日 時：2月22日
場 所：近畿大学東大阪キャンパス
要 務：学会参加、研究発表
出 席 者：高橋泉

◇「宗教と社会」学会公認プロジェクト「現代社会における移民と宗教」プロジェクト 2024 年度第2回研究会

日 時：2月24日

場 所：東洋大学白山キャンパス
要 務：研究会参加、研究発表
出 席 者：高橋泉

◇「移民と共生」研究会

日 時：3月9日
場 所：ノートルダム清心女子大学
要 務：研究会参加
出 席 者：高橋泉

【出張】

◇2024年10月10日
出 張 先：神奈川県内在日米軍基地周辺地域
要 務：在日米軍基地周辺住民への聞き取り調査
出 張 者：高橋泉

◇2024年11月5日
出 張 先：神奈川県内外国人集住団地
要 務：外国人集住団地関係者への聞き取り調査
出 張 者：高橋泉

◇2024年11月23日～24日
出 張 先：兵庫県姫路市内
要 務：姫路定住促進センター跡地等調査
出 張 者：高橋泉

◇2024年12月15日
出 張 先：神奈川県藤沢市内寺院
要 務：インドシナ難民墓地調査、資料収集
出 張 者：高橋泉

◇2025年3月6日
出 張 先：カトリック横浜司教区
要 務：社会事業史調査、資料収集
出 張 者：高橋泉

◇2025年3月9日
出 張 先：岡山県岡山市内
要 務：在日韓国人教会調査
出 張 者：高橋泉

◇2025年3月23日
出 張 先：神奈川県藤沢市内寺院
要 務：インドシナ難民墓地調査、資料収集
出 張 者：高橋泉

◇2025年3月28日

出 張 先：岐阜県各務原市内
要 務：在日米軍基地跡地調査、資料収集
出 張 者：高橋泉

■個人研究 藤井麻央

【学会発表・研究会参加】
◇第78回神道宗教学会学術大会
日 時：2024年12月7日
場 所：オンライン
要 務：学会参加
出 席 者：藤井麻央

◇第2回西田天香研究会
日 時：2024年12月20日
場 所：一燈園
要 務：研究発表
出 席 者：藤井麻央

◇2024年度（公財）国際宗教研究所シンポジウム
日 時：2025年2月15日
場 所：オンライン
要 務：公開研究会参加
出 席 者：藤井麻央

◇第203回 駒沢宗教学研究会・関東地区修士論文発表会
日 時：2025年3月28日
場 所：駒澤大学
要 務：公開研究会参加
出 席 者：藤井麻央

【出張】

◇2025年2月22日～25日
出 張 先：宗忠神社、岡山県立図書館、西光寺、大島
青松園他
要 務：資料調査、見学
出 張 者：藤井麻央

真宗総合研究所彙報
2024. 4. 1 ~ 2025. 3. 31

■共同研究 武田和哉班

【研究班内 史料会読会】

◇『遼史』史料会読会（2024年度第1回）
日 時：2024年4月24日 13時～17時半
場 所：龍谷大学深草学舎及びオンライン
会読担当者：武田和哉
出 席 者：武田和哉・藤原崇人・古松崇志・森部豊・
赤木崇敏・毛利英介・齊藤茂雄・
小國結菜・渡辺健哉（班外）

◇『遼史』史料会読会（2024年度第2回）
日 時：2024年6月29日 13時～17時半
場 所：オンライン
会読担当者：赤木崇敏
出 席 者：武田和哉・赤木崇敏・古松崇志・
藤原崇人・毛利英介・齊藤茂雄・
小國結菜・渡辺健哉（班外）

◇『遼史』史料会読会（2024年度第3回）
日 時：2024年8月3日 13時～17時半
場 所：真総研ミーティングルーム及びオンライン
会読担当者：小國結菜
出 席 者：武田和哉・小國結菜・毛利英介・齊藤茂雄

◇『遼史』史料会読会（2024年度第4回）
日 時：2024年9月14日 13時～17時半
場 所：真総研ミーティングルーム及びオンライン
会読担当者：齊藤茂雄
出 席 者：武田和哉・齊藤茂雄・藤原崇人・
赤木崇敏・毛利英介

◇『遼史』史料会読会（2024年度第5回）
日 時：2024年11月9日 13時～17時半
場 所：真総研ミーティングルーム及びオンライン
会読担当者：渡辺健哉（大阪公立大学）
出 席 者：武田和哉・藤原崇人・毛利英介・
小國結菜・渡辺健哉（班外）

◇『遼史』史料会読会（2024年度第6回）
日 時：2025年1月24日 13時～17時半
場 所：真総研ミーティングルーム及びオンライン
会読担当者：藤原崇人
出 席 者：武田和哉・藤原崇人・毛利英介・

小國結菜・渡辺健哉（班外）

◇『遼史』史料会読会（2024年度第7回）
日 時：2025年3月1日 13時～17時半
場 所：真総研ミーティングルーム及びオンライン
会読担当者：毛利英介
出 席 者：武田和哉・毛利英介・古松崇志・藤原崇人・
赤木崇敏・齊藤茂雄・渡辺健哉（班外）

【研究班内 研究打ち合わせ及び史跡踏査】

◇GIS操作確認と研究打ち合わせ（第1回）
日 時：2024年7月5日～6日
場 所：真総研共同研究班ブース
参 加 者：武田和哉・高橋亘

◇GIS操作確認と研究打ち合わせ（第2回）及び都城
跡・寺院跡の踏査、展示施設の見学（第1回）
日 時：2024年9月20日～22日
場 所：真総研共同研究班ブース及び京都府・奈良
県内都城跡・寺院跡・博物館等展示施設
参 加 者：武田和哉・高橋亘

◇GIS操作確認と研究打ち合わせ（第3回）及び都城
跡・寺院跡の踏査、展示施設の見学（第2回）
日 時：2025年1月10日～11日
場 所：真総研共同研究班ブース及び奈良県内都城
跡・寺院跡・博物館等展示施設
参 加 者：武田和哉・高橋亘

【班員の科研班との協力提携・ワークショップ開催】

◇協力・提携の外部科研名：2020-24年度・日本学術
振興会・基盤（B）「モンゴル（元）時代のインドシ
ナ半島大陸部諸王朝における宗教美術の諸相研究」
（代表：水野さや（金沢大学）・研究協力者：武田和哉）

◇2024年度第1回科研班ワークショップ

日 時：2024年8月3日
場 所：独立行政法人奈良文化財研究所平城宮跡資
料館小講堂（奈良県奈良市）及びオンライン
参 加 者：武田和哉（コーディネイト・司会進行担
当）・水野さや（主催者）ほか12名

◇2024年度第3回科研班ワークショップ

日 時：2025年2月8日
場 所：真総研ミーティングルーム及びオンライン
参 加 者：水野さや（主催者）・武田和哉 ほか12名

【班員が主催する国際シンポジウムへの参加】

◇早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究
所国際シンポジウム『生と死の儀礼空間 -日中の
都城・陵墓・寺院の発掘事例から-』

主 催：2023-24 年度・日本学術振興会・二国間交
流事業『日中古代都城の調査方法に関する
比較考古学的研究』（代表：城倉正祥（早
稲田大学）・董新林（中国社会科学院考古
研究所））

日 時：2025 年 3 月 15～16 日
場 所：早稲田大学戸山キャンパス（東京都新宿
区）36 号館及びオンライン

参 加 者：城倉正祥（主催者・2 日目報告・全日程通
訳担当）・武田和哉（初日コメント担当）・
古松崇志（初日報告担当）ほか 2 日間
延べ 244 名

【学会参加出張】

◇第 25 回遼金西夏史研究会大会
日 時：2025 年 3 月 22～23 日
場 所：東京都立大学南大沢キャンパス本部棟（東
京都八王子市）

出張参加者：武田和哉

【研究成果物の刊行】

成果物名：『遼史訳注稿 4 -景宗本紀-』
〔『遼史』研究成果報告書 第四冊〕[ISSN 2436-8229]
編 者 名：赤木崇敏・武田和哉・森部豊・小國結菜
執筆者名：武田和哉・齊藤茂雄・森部豊・藤原崇人・
小國結菜・赤木崇敏・毛利英介
刊 行 日：2025 年 2 月 28 日

■共同研究 松川節班

【出張記載】

◇2024 年 7 月 27 日～28 日, 8 月 3 日～15 日
出 張 先：モンゴル国ウランバートル市, バヤンホン
ゴル県, ザブハン県, アルハンガイ県, ト
ップ県
要 務：チンギス・ハーン崇拝文書の研究, チンギ
ス・ハーン行宮の巡検調査, チンギス・
ハーン行宮についての共同研究, サアリ
ハール遺跡試掘およびその結果整理。

出 張 者：松川節

■個人研究 宮崎健司班

【学会発表・研究会参加】

◇Symposium on the Shosoin “Tangible Knowledge:

Japan’s Shosoin and the Making of Manuscripts,
Treasures, and Archives.”

日 時：2025 年 3 月 1 日～3 月 2 日
場 所：米国・Princeton University
発 表 者：大艸啓・宮崎健司
参 加 者：大艸啓・宮崎健司

【出張】

◇2024 年 8 月 26 日
出 張 先：島根県立古代出雲歴史博物館
要 務：古写経調査
出 張 者：宮崎健司

◇2024 年 8 月 27 日
出 張 先：島根大学附属図書館
要 務：古写経調査
出 張 者：宮崎健司

◇2024 年 10 月 11 日
出 張 先：五島美術館
要 務：古写経調査
出 張 者：大艸啓・宮崎健司

◇2024 年 11 月 11 日
出 張 先：佐川記念神道博物館
要 務：古写経調査
出 張 者：宮崎健司

◇2025 年 2 月 28 日
出 張 先：米国・Princeton University Firestone Li-
brary
要 務：古写経調査
出 張 者：大艸啓・宮崎健司

◇2025 年 3 月 4 日
出 張 先：米国・Harvard Art Museums・Harvard
Art Museums Summerville Research Fa-
cility
要 務：古写経調査
出 張 者：大艸啓・宮崎健司

◇2025 年 3 月 24 日
出 張 先：阪本龍門文庫
要 務：古写経調査
出 張 者：宮崎健司



〈真宗総合研究所ホームページ〉

研 究 所 報 第 86 号

2025 年 9 月 1 日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp